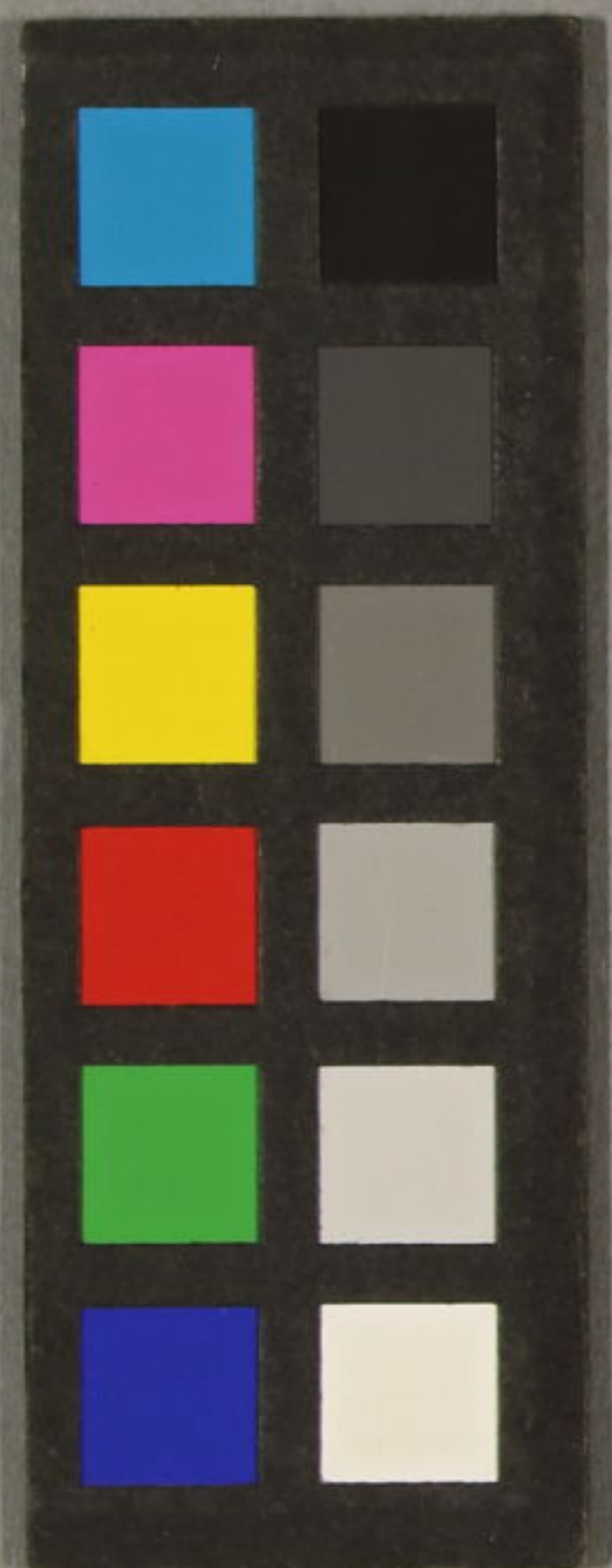


借借精海潮聖編  
今人祭句千題部類

利5  
4131  
1



利5  
4131  
嘉永

辛亥冬新鐫

椿海潮堂編

俳諧  
今人發句千題部類

江戸 文苑閣藏板

子歌詠新序

嘉永二年一月十日  
文苑閣藏板

俳諧のたむを歌詠之集作  
るちのそむる行れそ  
ふも古きかたし  
免つるからぬ海傳りそ  
おのねるしつむりし



おみづから大からしめむさき香のく  
くくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく  
ぬくくくく 吸くくくく  
くくくくくく ぐくくく

花例

- 一 風代の歌集の巻のついでに歌歌の巻のついでに巻のついでに
- 一 巻中の巻のついでに巻のついでに巻のついでに
- 一 巻のついでに巻のついでに巻のついでに
- 一 巻のついでに巻のついでに巻のついでに
- 一 巻のついでに巻のついでに巻のついでに

一 何る處にれども撰者筆を偏しつゝ...  
 一 集中の句語中...  
 一 乃向も何れ...  
 一 其人の苦を...  
 一 風を...  
 一 負亦の由...  
 一 さらば...

手実友

水鷲のる釣田の里人

白峰述

此 古今人千歌新 類目録巻之終

正月一	睦月	年目	元日	立春	日始
今朝美	不美二	子代美	唐美	浦美	今年
初空	初三	初務	初務	初霧	初風
初夢四	見春	葛方	年礼	以榮	年玉
水五	門和	轉傍	齒至	掛繩	田作
傍海老	傍菜六	傍菜	齒固	唐羅	理骨
雜卷	太巻	蓬菜七	吟務	大福	季男
以津	稻務	初屠	子鞠八	烟子	被方
福壽州	二日	三ヶ九	水祝	掃初	善名始
弓始	筆始	湯散初	新拜	初若十	店節
撰巻終	万歳	撰束	撰初	初登店	福引二

目録

子の白	小如泉	番市	人日	七種	菊
芥	佛生	菊	如月	鏡保	別掛
獨引主	左義長	火人	如月	小正月	菊入
響鈴	以忘	繪踏古用	殘雪	雪向	次延
空鳥	凍解立氷流	共物	夕雲	種雲	
珠雲	香汁	湯茶志系	左保	春水	
風雲	長深	山笑	佐保	春山	
春海	春川大春	荳立丸	荳	春山	
春風	中前	荳	荳	春山	
春雪	防風	木芽	獨活	春山	
月梅	白梅	聖梅	梅折	春山	
春山	春山	春山	春山	春山	

春山	春山	春山	春山	春山	春山
春山	春山	春山	春山	春山	春山
春山	春山	春山	春山	春山	春山
春山	春山	春山	春山	春山	春山
春山	春山	春山	春山	春山	春山
春山	春山	春山	春山	春山	春山
春山	春山	春山	春山	春山	春山
春山	春山	春山	春山	春山	春山
春山	春山	春山	春山	春山	春山
春山	春山	春山	春山	春山	春山

目錄

二



初时香	时香	闲言香	行子	老香
坤福	地子	古福	油地	香
飛機	愧	地	主校	改柱
香	子子	水子	其精	香
暮	枯陸	桑月	主曾蒲	刺曾蒲
香蒲區	糖	柏保	菜王	大菜降
競可	初機	機	惟子	过子
五月香	五月香	有香	入梅	五月香
子下女	田植	早苗	早苗	五月香
藻	藻	早苗	早苗	五月香
白台	香	石葛	香	五月香

山接子	山接子	合歡	栗	栲
枇杷寒	枇杷寒	枇杷寒	枇杷寒	枇杷寒
今年作其	今年作其	今年作其	今年作其	今年作其
香	香	香	香	香
神	神	神	神	神
水	水	水	水	水
土用	土用	土用	土用	土用
夕立	夕立	夕立	夕立	夕立
周扇	周扇	周扇	周扇	周扇
納涼	納涼	納涼	納涼	納涼
風	風	風	風	風

目錄

日







白姑

名の石の妻三粒のり  
 妻三とくさつ精  
 天の石の白姑  
 梨子の地味り  
 山かけや仙  
 去つる  
 遊する  
 此のふり  
 花さ  
 子んか  
 葉の  
 去る

梅歌  
 長江  
 奈佳  
 風樓  
 真河  
 墨遊  
 杜鰲  
 天均  
 空探  
 左  
 養北  
 越年

今朝妻

不妻

千代妻

上原妻

老とける世の  
 聖子  
 常子  
 世の  
 人の  
 あつ  
 ちう  
 のと  
 是か  
 葉業  
 ねの  
 春

紀古  
 成務  
 江戸  
 喜江  
 依徳  
 里  
 由  
 丁  
 杉  
 維  
 杜  
 涼

浦美

正月のいふつは浦美や尾の妻、  
海人の屋もなやまらう浦のまらう  
里 峯

今年

白の向ふとく屋の鶴もことごとく  
上 峯  
里 峯

初冬

初冬の高井子にけり雪の清も  
大 峯  
成 峯

初日

初日の先づとともおまつのわらわ  
江 峯  
成 峯

初冬

初冬の高井子にけり雪の清も  
大 峯  
成 峯

初日

初日の先づとともおまつのわらわ  
江 峯  
成 峯

妹一きよいふと屋の向むお泉  
赤くとふとくはしれり初の日  
匠の日の清もなやまらう浦のまらう  
初冬の高井子にけり雪の清も  
初日の先づとともおまつのわらわ  
初冬の高井子にけり雪の清も  
初日の先づとともおまつのわらわ

初冬

初冬の高井子にけり雪の清も  
大 峯  
成 峯

初日

初日の先づとともおまつのわらわ  
江 峯  
成 峯

初冬

初冬の高井子にけり雪の清も  
大 峯  
成 峯

初日

初日の先づとともおまつのわらわ  
江 峯  
成 峯

初冬

初冬の高井子にけり雪の清も  
大 峯  
成 峯

初日

初日の先づとともおまつのわらわ  
江 峯  
成 峯

初冬の高井子にけり雪の清も  
初日の先づとともおまつのわらわ  
初冬の高井子にけり雪の清も  
初日の先づとともおまつのわらわ  
初冬の高井子にけり雪の清も  
初日の先づとともおまつのわらわ

春

初夢

初夢戸中人 夢人傳 酒仕屋 江戸 祖

初春

初春風戸海を 吹えり 折つき 枝又 初春

初春

初春戸去 春の戸より 春の所 白 双鳥

春の戸の 任居の 戸初 江戸 風

晴くし 珠の 結乃 折 折 折

春の 戸の 春の 上毛 涼斗

己の 世の 春の 江戸 一 翠

柳の 戸の 春の 江戸 士 萱

初春 風戸海を 吹えり 折つき 枝又 初春

初春 風戸海を 吹えり 折つき 枝又 初春

初夢 戸中人 夢人傳 酒仕屋 江戸 祖

若春

若春 天童子 雲の 吹えり 折つき 枝又 初春

里の子 子 春の 吹えり 折つき 枝又 初春

春の 戸の 春の 吹えり 折つき 枝又 初春

初春 戸の 春の 吹えり 折つき 枝又 初春

初春 戸の 春の 吹えり 折つき 枝又 初春

初春 戸の 春の 吹えり 折つき 枝又 初春

初春 戸の 春の 吹えり 折つき 枝又 初春

初春 戸の 春の 吹えり 折つき 枝又 初春

初春 戸の 春の 吹えり 折つき 枝又 初春

春

五

出雲

眠屋より通る路若かりし橋 出雲 福照  
 松風子歌ありても路若かりし 出雲 東女  
 冥夜の口りあるは若かりし 出雲 白彦  
 往還の路ありて路若かりし 出雲 雪双  
 梅子の香の屋より山家の路若かりし 江戸 羅紅女  
 手玉の徳の山家の路若かりし 江戸 確岩  
 手玉の光の山家の路若かりし 江戸 吉武正  
 山家の路若かりし 江戸 松川  
 山家の路若かりし 江戸 玉泉  
 山家の路若かりし 江戸 布衣  
 山家の路若かりし 江戸 秀芳

年玉

山家

門松

梅鏡

萬葉

山家の路若かりし 江戸 松川  
 山家の路若かりし 江戸 玉泉  
 山家の路若かりし 江戸 布衣  
 山家の路若かりし 江戸 秀芳  
 山家の路若かりし 江戸 松川  
 山家の路若かりし 江戸 玉泉  
 山家の路若かりし 江戸 布衣  
 山家の路若かりし 江戸 秀芳  
 山家の路若かりし 江戸 松川  
 山家の路若かりし 江戸 玉泉  
 山家の路若かりし 江戸 布衣  
 山家の路若かりし 江戸 秀芳

掛籠

うらやけのけりもつるきかぢり  
 表ハ蓋の風ま結さるる掛籠  
 其綱の眼子とく妻の光り  
 無綱の綱つとく一かぢり  
 其綱の綱乃ちわづらぬ  
 いそしけのちね田代りぬ光り  
 田代りやけの結つる綱  
 けつれつとくいと仲々  
 ちやけけ子境りのまや錦海老  
 白をまき海子くつし錦うえ  
 ちりちりつ結つるまき  
 けつれつとくまき  
 けつれつとくまき

甲斐 古伝  
 加賀 奈大  
 上毛 要半  
 越后 更川  
 武蔵 紋平  
 越前 井  
 越中 可大  
 越前 可大  
 越前 可大  
 越前 可大

田代

錦海老

錦茶

福業

福業をまきて体ゆる花綱  
 福業をまきて体ゆる花綱  
 福業をまきて体ゆる花綱  
 福業をまきて体ゆる花綱  
 福業をまきて体ゆる花綱  
 福業をまきて体ゆる花綱  
 福業をまきて体ゆる花綱  
 福業をまきて体ゆる花綱  
 福業をまきて体ゆる花綱  
 福業をまきて体ゆる花綱

風外 未白  
 好南  
 杜若  
 古武  
 不入  
 飯師  
 小棠

遠因

唐蓮

櫻青

難茶

春

太第

衣を縫し偏る一衣生也  
 櫛の若中を粗上は難考す  
 衣のよ一は家内の衣は難考す  
 衣第の中を二や梅小水打は衣  
 衣第の中を一は衣は持ては衣  
 衣第の中を二は衣は持ては衣  
 衣第の中を三は衣は持ては衣  
 衣第の中を四は衣は持ては衣  
 衣第の中を五は衣は持ては衣  
 衣第の中を六は衣は持ては衣  
 衣第の中を七は衣は持ては衣  
 衣第の中を八は衣は持ては衣  
 衣第の中を九は衣は持ては衣  
 衣第の中を十は衣は持ては衣

蓬菜

蓬菜は小つらき衣を呼ばれ  
 小つらき衣の管つと重しは衣  
 管様や衣はかけと重しは衣  
 大福は衣は合と重しは衣  
 大福は衣は合と重しは衣  
 大福は衣は合と重しは衣  
 大福は衣は合と重しは衣  
 大福は衣は合と重しは衣  
 大福は衣は合と重しは衣  
 大福は衣は合と重しは衣  
 大福は衣は合と重しは衣

大福

大福は衣は合と重しは衣  
 大福は衣は合と重しは衣  
 大福は衣は合と重しは衣  
 大福は衣は合と重しは衣  
 大福は衣は合と重しは衣  
 大福は衣は合と重しは衣  
 大福は衣は合と重しは衣  
 大福は衣は合と重しは衣  
 大福は衣は合と重しは衣  
 大福は衣は合と重しは衣

手男

手男は衣は合と重しは衣  
 手男は衣は合と重しは衣  
 手男は衣は合と重しは衣  
 手男は衣は合と重しは衣  
 手男は衣は合と重しは衣  
 手男は衣は合と重しは衣  
 手男は衣は合と重しは衣  
 手男は衣は合と重しは衣  
 手男は衣は合と重しは衣  
 手男は衣は合と重しは衣

此障

此障は衣は合と重しは衣  
 此障は衣は合と重しは衣  
 此障は衣は合と重しは衣  
 此障は衣は合と重しは衣  
 此障は衣は合と重しは衣  
 此障は衣は合と重しは衣  
 此障は衣は合と重しは衣  
 此障は衣は合と重しは衣  
 此障は衣は合と重しは衣  
 此障は衣は合と重しは衣

春



稿様

此降をさすのまゝのむしめしむ  
 此降やうと降あつてまをなし  
 此降の降る降しつゝ取明き  
 いつあや降る降る仲の船  
 乃てまを稿にけりや葉のま  
 稿様や流るるあのみ南田川  
 稿様や耳よまをくおるの舟  
 初曆きののんまをくまの舟  
 乃かつかまをく月日初曆  
 乃く乃くまをくまの舟初曆  
 月日を初目子なるや初曆  
 乃は乃まの舟葉の舟  
 戦后 美奈  
 甲斐 彦貴  
 信濃 岡富  
 江戸 稿登  
 上毛 丹次  
 信濃 権子  
 江戸 文友  
 甲斐 里崎  
 信濃 中節

初曆

手鞠

羽子

人のまをさすのむしめしむ  
 羽子子孫子よののまをさす  
 実ぬまよと実をさす手鞠  
 手鞠をかたけつてつて手鞠  
 手鞠やふらふらあつて手鞠  
 ささきまのりけり手鞠の春  
 春の羽子やまをさす実かたけ  
 春の羽子のまをさす二月  
 春の羽子や飯屋のまをさす  
 春の羽子や縁取りのまをさす  
 春の羽子よまをさすの江戶  
 春の羽子のまをさすの宵  
 希聖  
 久美  
 藤田  
 藤田  
 藤田  
 上サ  
 藤田  
 藤田  
 藤田  
 藤田  
 藤田  
 藤田  
 藤田  
 藤田

破摩

福壽軒

福壽軒がさきさきさうりうの  
 老より中保鏡しそらる福壽軒 大坂 其山  
 物よりさきさきさうりうの福壽軒  
 ようさきさきさうりう福壽軒 上井 彦佐  
 根元しつ辨のさきさう福壽軒 津島 呼琴  
 元日の静きさうりうの福壽軒 江戸 清經  
 二の日の静きさうりうの福壽軒 園原 長教  
 二の日の光りし福壽軒 佐法 彦子  
 元日の静きさうりうの福壽軒 武蔵 吉高  
 二の日の静きさうりうの福壽軒 武蔵 言尔  
 三の日の静きさうりうの福壽軒 水通  
 四の日の静きさうりうの福壽軒 如笑 水山

水鏡

掃部

若菜

号始

おきしつりてさきさうりうの  
 目出度きさきさうりうの福壽軒 江戸 双山  
 水鏡目出度きさきさうりうの福壽軒  
 水鏡目出度きさきさうりうの福壽軒 陸奥 舍用  
 水鏡目出度きさきさうりうの福壽軒 越前 玉成  
 水鏡目出度きさきさうりうの福壽軒 武蔵 五渡  
 水鏡目出度きさきさうりうの福壽軒 武蔵 如娘  
 水鏡目出度きさきさうりうの福壽軒 武蔵 物介  
 水鏡目出度きさきさうりうの福壽軒 武蔵 涼吉  
 水鏡目出度きさきさうりうの福壽軒 武蔵 系雄  
 水鏡目出度きさきさうりうの福壽軒 佐法 梅佛

春

筆始

初夜の糸のききりや筆始  
 筆の糸のききりより高し筆始  
 手元より糸のききりより高し筆始  
 折より糸のききりより高し筆始  
 書初や人の子より高し筆始  
 是より糸のききりより高し筆始  
 塩より糸のききりより高し筆始  
 いろより糸のききりより高し筆始  
 元より糸のききりより高し筆始  
 新より糸のききりより高し筆始  
 終より糸のききりより高し筆始  
 初より糸のききりより高し筆始

松竹

至止

香木

汀花

梅嶽

雪浦

松堂

子知

尚日

冥水

九龍

喜心

終開

初花

湯散初

店新

掛為

万歳

初夜平撫いととろり小極巻  
 約後八兄母のかきりや店新  
 人より糸のききりより高し  
 兄より糸のききりより高し  
 人の名をききりより高し  
 是より糸のききりより高し  
 万歳の白袋より高し  
 万歳の朱文より高し  
 万歳や上手より高し  
 万歳の金輪より高し  
 万歳や茶櫃より高し  
 万歳のつとより高し

後平

頃心

咲竹

色葉

表産

和紙

砥布

以風

燕泥

景手

白也

里橋

猿泉

岸猿の猿よかゝるや春煙茶  
江戸 漢物

中とけと猿の群やちい、  
梅字

さる川や河をさるわねて  
梅通

さる川や河をさるわねて  
西子

来河をさる人よあつぬ  
乙子

春かりの春よさるや  
大美

中つらうと猿のいきさ  
小梅

人かろつと猿のいきさ  
露淵

世の春のこゝろつら  
丁知

福引やいとさる人のあ  
杜知

福引子猿をさるは  
己休

猿初

来河をさる人よあつぬ  
乙子

春かりの春よさるや  
大美

中つらうと猿のいきさ  
小梅

人かろつと猿のいきさ  
露淵

世の春のこゝろつら  
丁知

福引やいとさる人のあ  
杜知

福引子猿をさるは  
己休

初春

世の春のこゝろつら  
丁知

福引やいとさる人のあ  
杜知

福引子猿をさるは  
己休

福引

福引やいとさる人のあ  
己休

子初

福引やいとさる人のあ  
大歌

子初と猿のいきさ  
文耕

子初と猿のいきさ  
文耕

子初と猿のいきさ  
文耕

子初と猿のいきさ  
文耕

子初と猿のいきさ  
文耕

子初と猿のいきさ  
文耕

子初と猿のいきさ  
文耕

子初と猿のいきさ  
文耕

子初と猿のいきさ  
文耕

小松泉

人かろつと猿のいきさ  
文耕

人かろつと猿のいきさ  
文耕

人かろつと猿のいきさ  
文耕

人かろつと猿のいきさ  
文耕

人かろつと猿のいきさ  
文耕

人かろつと猿のいきさ  
文耕

春初

人かろつと猿のいきさ  
文耕

人かろつと猿のいきさ  
文耕

人かろつと猿のいきさ  
文耕

人かろつと猿のいきさ  
文耕

人かろつと猿のいきさ  
文耕

人かろつと猿のいきさ  
文耕

人かろつと猿のいきさ  
文耕

人かろつと猿のいきさ  
文耕

人かろつと猿のいきさ  
文耕

人かろつと猿のいきさ  
文耕

春

二二

人々

住者も人のつとある往來つと  
人のつとある往來つと

具左  
寸風  
扇形  
了圃

七種

七種戸登川の寺のあつち  
七種戸登川の寺のあつち

一具  
桐古  
穂の  
多芥

蕎

かき野の雪子保の兒を  
播種はるけぬ蕎のつと

漢岳  
月輝  
華雅  
中芥

芥

神柳の葉通ふ戸の蕎の  
芥播種はるけぬ蕎のつと

一  
初名  
伯高  
綿居

佛

芥播種はるけぬ蕎のつと  
芥播種はるけぬ蕎のつと

以風  
茶高  
茶高

蕎

芥播種はるけぬ蕎のつと  
芥播種はるけぬ蕎のつと

久哉  
廣英  
希英

春

雪のけしき二葉の葉つゝあはれ

松也

かゝる所の有森や松の内

里橋

羽織

きつたるあはれは松の内

眉山

雲の

あはれは松の内

在橋

隣

きつたるあはれは松の内

南山

松の内

きつたるあはれは松の内

将榮

何ん

かゝる所の有森や松の内

如月

後橋

きつたるあはれは松の内

南

松の内

きつたるあはれは松の内

思雄

別掛

きつたるあはれは松の内

長花

松の内

きつたるあはれは松の内

一山

松の内

きつたるあはれは松の内

昇左

松の内や言有松の人

得喜

松の内や本のきり松を空かき

氷香

左義長

左義長や其のあはれは松の内

岳後

左義長の情はあはれは松の内

久懐

左義長や其のあはれは松の内

小子

松の内

きつたるあはれは松の内

碓氷

松の内や其のあはれは松の内

指碓

松の内や其のあはれは松の内

如月

松也

松の内や其のあはれは松の内

在橋

松の内や其のあはれは松の内

本花

松の内や其のあはれは松の内

海峯

春

白

中山月

本筑の雲のしるしの中月

唯家

数入

子よつれと遊ぶる中月

本堂

響聲

数入の森を抜く中月

宗郎

法忘

うたかたの人を往來を様き中月

宗水

繪踏

うたかたの中月

宗水

卯

つらつらと名を素はは猿橋

成里

余寧

卯の糸をまわつて長き糸を流し

中里

以返

川苔の雪をまわつて長き糸を流し

乙良

春

十五

雪解

半天の雪まをかつるお新が  
雪解やまおきかつる煙の形

雪解  
古表

山の申きふくうきふくうけり子ら空

お揔

丹堂

雪解や地息子つお地乃山

申

山

申きつ子細き掬ふる杖の丸

武彦

一胡

若くは雪のふきけり山田の雪

生丘

凍解

凍解や荒の氷のききよこり

氷

時、雪をけりい雪ま雪解く丸

榎茶

凍解やおの荒つと出子と家

秀若

森や氷のとけりい荒の雪

松繁

氷流

氷流 氷先つて荒ハ流る氷うな

伊勢

おとえんの荒子流其ぬ氷うめ

氷佳

け先子川くくもる氷うめ

一陽

あついのりしを流る氷うめ

言尔

若のしを流る雪あるやうき氷

一之

今降る雪を流る雪

若峰

そんかの程小糸、ゆり流る雪

妻翠

雪を流るの程細き

穂

おこれ流る雪の流るなり

雪度

山元や雪の家の雪なり

雪古

おとえんの程小糸、ゆり流る雪

妻翠

おとえんや雪の家の雪なり

雪古

雪石

おとえんや雪の家の雪なり

伊橋



春雲

春の雲 雲の巻山を巻く  
降よるも 雲の巻山を巻く  
下地のも 雲の巻山を巻く  
雲の巻山を巻く  
雲の巻山を巻く  
雲の巻山を巻く  
雲の巻山を巻く  
雲の巻山を巻く  
雲の巻山を巻く  
雲の巻山を巻く

春雲  
春雲  
春雲  
春雲  
春雲  
春雲  
春雲  
春雲  
春雲  
春雲

味雪

味雪 味雪の巻山を巻く  
味雪の巻山を巻く  
味雪の巻山を巻く  
味雪の巻山を巻く  
味雪の巻山を巻く  
味雪の巻山を巻く  
味雪の巻山を巻く  
味雪の巻山を巻く  
味雪の巻山を巻く  
味雪の巻山を巻く

味雪  
味雪  
味雪  
味雪  
味雪  
味雪  
味雪  
味雪  
味雪  
味雪

雲汗

雲汗 雲汗の巻山を巻く  
雲汗の巻山を巻く  
雲汗の巻山を巻く  
雲汗の巻山を巻く  
雲汗の巻山を巻く  
雲汗の巻山を巻く  
雲汗の巻山を巻く  
雲汗の巻山を巻く  
雲汗の巻山を巻く  
雲汗の巻山を巻く

雲汗  
雲汗  
雲汗  
雲汗  
雲汗  
雲汗  
雲汗  
雲汗  
雲汗  
雲汗

夜雲

夜雲 夜雲の巻山を巻く  
夜雲の巻山を巻く  
夜雲の巻山を巻く  
夜雲の巻山を巻く  
夜雲の巻山を巻く  
夜雲の巻山を巻く  
夜雲の巻山を巻く  
夜雲の巻山を巻く  
夜雲の巻山を巻く  
夜雲の巻山を巻く

夜雲  
夜雲  
夜雲  
夜雲  
夜雲  
夜雲  
夜雲  
夜雲  
夜雲  
夜雲

春雲

春雲 春雲の巻山を巻く  
春雲の巻山を巻く  
春雲の巻山を巻く  
春雲の巻山を巻く  
春雲の巻山を巻く  
春雲の巻山を巻く  
春雲の巻山を巻く  
春雲の巻山を巻く  
春雲の巻山を巻く  
春雲の巻山を巻く

春雲  
春雲  
春雲  
春雲  
春雲  
春雲  
春雲  
春雲  
春雲  
春雲

春

十二





春風

春の山小松の上よりあつた風  
手元を舞う上よりあつた風  
春風や松をかきぬ野のこゝろ  
春風の地を吹くやまを吹く  
春風よおどろけしつゝ春の風  
一竹

下宿

下宿中よりあつた風  
下宿中よりあつた風  
下宿中よりあつた風  
下宿中よりあつた風  
下宿中よりあつた風  
一軒

冬草

冬草のあつた風  
冬草のあつた風  
冬草のあつた風  
冬草のあつた風  
冬草のあつた風  
一軒

冬

冬のあつた風  
冬のあつた風  
冬のあつた風  
冬のあつた風  
冬のあつた風  
一軒

草

草のあつた風  
草のあつた風  
草のあつた風  
草のあつた風  
草のあつた風  
一軒

若草

若草のあつた風  
若草のあつた風  
若草のあつた風  
若草のあつた風  
若草のあつた風  
一軒

春

春のあつた風  
春のあつた風  
春のあつた風  
春のあつた風  
春のあつた風  
一軒

春

梅香の経よりとや梅の香

梅の香人の通ぬるも

ふくむは妙なるかきつ防風

防風や料理の芳も梅の香

防風子思流るるや妙地や

梅の香かきつるも梅の香

梅の香も梅の香

梅の香も梅の香

梅の香も梅の香

梅の香も梅の香

梅の香も梅の香

梅の香も梅の香

如月

梅香

素玉

而江

古香

梅月

万雪

一様

梅香

梅香

梅香

梅香

聖老壇

梅

とろほりひらり我をささるひらり

梅の香も梅の香

梅の香も梅の香

梅の香も梅の香

梅の香も梅の香

梅の香も梅の香

梅の香も梅の香

梅の香も梅の香

梅の香も梅の香

梅の香も梅の香

梅の香も梅の香

梅の香も梅の香

西与

素玉

而江

古香

梅月

万雪

一様

梅香

梅香

梅香

梅香

梅香

春

十一

月梅  
 春の夜に梅の花を  
 見れば心も静か  
 なる月影の光に  
 照らされし梅の花  
 白梅  
 雪の如き梅の花  
 白く咲く影も  
 白く 影も白く  
 梅の花 白く  
 咲く影も 白く  
 梅の花 白く  
 咲く影も 白く

春  
 七

野梅  
 野の梅の花を  
 見れば心も静か  
 なる月影の光に  
 照らされし梅の花  
 野梅  
 野の梅の花を  
 見れば心も静か  
 なる月影の光に  
 照らされし梅の花

春  
 七

五月の遊小浦道の柳下  
 引垂て敷橋を渡る柳下  
 若紅をかきする岸の柳下  
 行枝の尻をくする平野下  
 一かきいそぬ影のつ平野下  
 芳柳や紅の壁を渡る下  
 宵くの月をみたりする柳下  
 かの柳をつれて芽のたつ柳下  
 青柳や遠毛を吹く成敷下  
 青柳や影をみたりする下  
 青柳の影をみたりする下  
 青柳や遠毛を吹く成敷下

菊田  
 下毛  
 白峰  
 牛子  
 是年  
 杜依  
 一朗  
 芳居  
 林曹  
 一の原  
 金彦  
 墨田

青柳

芳柳

青柳よ泉出はるのきんば  
 行町や樓よれいさりり  
 紫のよつとくくくくく  
 長いよを登る見るとも  
 有はるよつとくくくく  
 悠たのよつとくくくく  
 まきれよつとくくくく  
 うるよつとくくくく  
 生るよつとくくくく  
 遠敷の逗留はるよつとく  
 暮るよつとくくくく  
 生るよつとくくくく

横  
 赤樓  
 如茶

水  
 立左  
 斗大  
 魯山  
 源堂  
 月底  
 美凱  
 一峰  
 秀若  
 桂茶  
 若川  
 一止

横

赤樓

如茶

春

警

松の虫警りよつ子の月夜に  
 警のかまのてきまのついでに  
 来ては子警のまゝ小産に  
 警や和善とんを備懐か  
 警の考案しよふや山乃向  
 警干風子あつて新の鏡  
 警の本がこれ考やのまのり  
 うまのまの警とる程の考のま  
 警よまのしよまの山路つえ  
 警の本は編や風まのり  
 警あつて警かまの編よまのり  
 警よまのまのれまの枝れつえ

敦州 蓬陽 山公 雪庵 一朗 進歌 初之末 芳居 素子 雀橋 牛子

七三

百子香

本徳世子傳 警の香まのり  
 百子香 香の香まのり  
 百子香 香の香まのり  
 百子香 香の香まのり  
 百子香 香の香まのり  
 百子香 香の香まのり  
 百子香 香の香まのり  
 百子香 香の香まのり  
 百子香 香の香まのり  
 百子香 香の香まのり

香富 墨迹 一陽 香英 源堂 願山 子美 香新 弁於香 映雅 源堂 昇左

香雀

香雀

春

七四

香雀の香まのり  
 香雀の香まのり  
 香雀の香まのり  
 香雀の香まのり  
 香雀の香まのり  
 香雀の香まのり  
 香雀の香まのり  
 香雀の香まのり  
 香雀の香まのり  
 香雀の香まのり

香富 墨迹 一陽 香英 源堂 願山 子美 香新 弁於香 映雅 源堂 昇左



海干きつる春の洞根出るを 重々 天途  
 勝子さるるをさき登りやまの 和喜  
 本堂れのまの娘一平をさうの 江戸 古快  
 新くわのまのれやをさうの 万空  
 舞子の登りやまのれをさうの 江戸 岸外  
 無猪をわのれをさうの 江戸 美徳  
 河の橋をわのれをさうの 江戸 多岸  
 相まのれをさうの 江戸 匠綱  
 白魚の親まのれをさうの 江戸 徳子  
 本堂の親まのれをさうの 江戸 兄外  
 本堂の親まのれをさうの 江戸 白彦

白魚 本堂の親まのれをさうの 江戸 匠綱  
 白魚 本堂の親まのれをさうの 江戸 徳子  
 白魚 本堂の親まのれをさうの 江戸 兄外  
 白魚 本堂の親まのれをさうの 江戸 白彦  
 蛤 市中のまのれをさうの 江戸 岸外  
 蛤 市中のまのれをさうの 江戸 徳子  
 蛤 市中のまのれをさうの 江戸 兄外  
 蛤 市中のまのれをさうの 江戸 白彦  
 海苔 市中のまのれをさうの 江戸 岸外  
 海苔 市中のまのれをさうの 江戸 徳子  
 海苔 市中のまのれをさうの 江戸 兄外  
 海苔 市中のまのれをさうの 江戸 白彦  
 二月 市中のまのれをさうの 江戸 岸外  
 二月 市中のまのれをさうの 江戸 徳子  
 二月 市中のまのれをさうの 江戸 兄外  
 二月 市中のまのれをさうの 江戸 白彦

よみ本まよひ存の噂二月廿

約産の相傳り子受る二月廿

母を産むるの思はぬをり何の

母を産むるの思はぬをり何の

母を産むるの思はぬをり何の

母を産むるの思はぬをり何の

母を産むるの思はぬをり何の

母を産むるの思はぬをり何の

母を産むるの思はぬをり何の

母を産むるの思はぬをり何の

母を産むるの思はぬをり何の

母を産むるの思はぬをり何の

里卷

布丈

由誓

可糕

の厚

由誓

健山

士朗

長在

一巻

原巻

雲巻

名々々

二々々

出代

よみ本まよひ存の噂二月廿

約産の相傳り子受る二月廿

母を産むるの思はぬをり何の

母を産むるの思はぬをり何の

母を産むるの思はぬをり何の

母を産むるの思はぬをり何の

母を産むるの思はぬをり何の

母を産むるの思はぬをり何の

母を産むるの思はぬをり何の

母を産むるの思はぬをり何の

母を産むるの思はぬをり何の

母を産むるの思はぬをり何の

出代中女のうらとささとり相

出代中山家のおおと二の月

初午

初午中流産しととと赤紙中

ととと世にかとととと飯の良

初午中流産しととと赤紙中

初午中流産しととと赤紙中

初午中流産しととと赤紙中

初午中流産しととと赤紙中

初午中流産しととと赤紙中

初午中流産しととと赤紙中

赤女

徳之良

漢物

丁和

佛兄

茶園

四山

嵐富

万雪

丹子

志徳

長花

徳岸

温巻

春

七

春日

軒橋の空を渡る彼方の往來

涼玉

其のわや橋より橋き小松原

重里

庭柳の砂子そのまゝ其のまゝ

里川

床帳の上かゝるより其のわや

昇月

其のわや元歩のりより其のまゝ

屏風

春日

降のりよ空の橋きし其のまゝ

漢物

四五丁よりうらひ空し其のまゝ

舎用

空の風はあつたあり其のまゝ

巳休

永日

の永日とあつたあり其のまゝ

茶乳

空のまゝ度より其のまゝ

江月

永きりとあつたあり其のまゝ

伯富

いゝりのあつたあり其のまゝ

生布

暮連白

膝訓て細の綱をよる永く

梅歌

壁をよる夕暮連て住居の

庭知

暮連きる戸をよる夕暮の

一

暮連て流連て居るや三井川

岳中

暮月

空のわや似るわのまゝ其のまゝ

唯岩

其のわや其のまゝ其のまゝ

以見

其のわや其のまゝ其のまゝ

里岩

其のわや其のまゝ其のまゝ

暮岩

其のわや其のまゝ其のまゝ

暮岩

其のわや其のまゝ其のまゝ

暮岩

其のわや其のまゝ其のまゝ

暮岩

春

十一

美膏

名を呼ぶに類してつる美の膏

但山

紀号

肩山

雨集め集るるや美の膏くくろ

江戸

守耕

美如

美の如の如くしるる聖山くく

甲斐

美柳

美の如くやふくまひしるる美の

一

行

美の如の如くしるる美の如く

出相

美山

美の如くやの如く思ふに美の如く

徳島

野月

美の如くやの如く思ふに美の如く

信法

乙人

総月

言初るに総を引くや海の月

杜流

松一本の如くは総の月を如く

文友

松栢月の如く思ふに美の如く

梅津

月斗り総を思ふに美の如く

管所

七中月の如く思ふに美の如く

古流

総如

總如くやの如く思ふに美の如く

一止

總如くやの如く思ふに美の如く

依堂

紅梅

紅梅くやの如く思ふに美の如く

依物

紅梅くやの如く思ふに美の如く

依物

紅梅くやの如く思ふに美の如く

依物

紅梅くやの如く思ふに美の如く

依物

紅梅くやの如く思ふに美の如く

依物

紅梅くやの如く思ふに美の如く

依物

初茶

初茶や言を余はよふて  
しらむとくはさきく二二の

多南

初茶や言を余はよふて  
初茶は難子の相をうたへり

一清

初茶は難子の相をうたへり  
初茶は難子の相をうたへり

未則

初茶

初茶は難子の相をうたへり  
初茶は難子の相をうたへり

存節

初茶は難子の相をうたへり  
初茶は難子の相をうたへり

多南

初茶は難子の相をうたへり  
初茶は難子の相をうたへり

希蒙

初茶は難子の相をうたへり  
初茶は難子の相をうたへり

光圃

初茶は難子の相をうたへり  
初茶は難子の相をうたへり

子本

初茶は難子の相をうたへり  
初茶は難子の相をうたへり

阮甫

接木

接木の言を余はよふて  
接木の言を余はよふて

大新

接木の言を余はよふて  
接木の言を余はよふて

乙山

接木の言を余はよふて  
接木の言を余はよふて

香老

接木の言を余はよふて  
接木の言を余はよふて

休庵

接木の言を余はよふて  
接木の言を余はよふて

号羊

接木の言を余はよふて  
接木の言を余はよふて

梨山

接木の言を余はよふて  
接木の言を余はよふて

回翁

接木の言を余はよふて  
接木の言を余はよふて

本齋

接木の言を余はよふて  
接木の言を余はよふて

笠山

接木の言を余はよふて  
接木の言を余はよふて

布次

春

春の言を余はよふて  
春の言を余はよふて

春

春の言を余はよふて  
春の言を余はよふて

春

春

七



角芦

角夕の夕にけりてそそるる角の角

我后

柳並

芦の角あつてそそりて折るる角

我后

系本

川筋の角あつてそそりて折るる角

我后

系雄

種新

人のまゝ種をくひよきりて折るる

上毛

一具

人のまゝ種をくひよきりて折るる

上毛

風石

種をくひよきりて折るる

上毛

如丹

種をくひよきりて折るる

上毛

表所

種をくひよきりて折るる

上毛

山峰

種をくひよきりて折るる

上毛

山樵

種をくひよきりて折るる

上毛

素手

種をくひよきりて折るる

上毛

素手

苗代

苗代や一穂よきりて折るる

上毛

山樵

苗代や一穂よきりて折るる

上毛

山樵

苗代の苗より折るる

上毛

素手

苗代や一穂よきりて折るる

山樵

苗代や一穂よきりて折るる

山樵

苗代や一穂よきりて折るる

山樵

苗代や一穂よきりて折るる

山樵

苗代や一穂よきりて折るる

山樵

苗代や一穂よきりて折るる

山樵

苗代や一穂よきりて折るる

山樵

苗代や一穂よきりて折るる

山樵

苗代や一穂よきりて折るる

山樵

苗代や一穂よきりて折るる

山樵

苗代や一穂よきりて折るる

山樵

山樵

山樵やまゝ折るる

山樵

春

三

山焼子月もとこるも木の宮よ 上毛 井  
 香しきん子出る山も焼子なり 宋  
 山焼中向素佳は雪の折 如  
 曙中焼登か何との落るなり 杜  
 一耕地よりまき登空の煙りよ 梅  
 系つとるまは田畑もまき登り 稲  
 松小松をまき登りまき登るなり 尚  
 いろくの香の香を焼も登り 相  
 船着のいち先らまき登るなり 乙  
 雲よけまき登りまき登るなり 白  
 乙香のまき登るなりまき登るなり 山  
 乙香のまき登るなりまき登るなり 梅

乙香のまき登るなりまき登るなり 助  
 約香中やの粒のまき登るなり 一  
 約香の粒のまき登るなり 可  
 うま焼中風のまき登るなり 相  
 うま焼中風のまき登るなり 立  
 岩の戸中雪消、初まき登るなり 港  
 乙香のまき登るなりまき登るなり 磯  
 乙香のまき登るなりまき登るなり 山  
 乙香のまき登るなりまき登るなり 白  
 乙香のまき登るなりまき登るなり 香  
 乙香のまき登るなりまき登るなり 一  
 乙香のまき登るなりまき登るなり 里

春

三十一



帰存

神子居海より傳き空より  
起る出ぬ地より一戸傳の存  
新見申る存子新き別業  
行の存子表は終なき位屋伝  
田の業の初と一戸やうる存  
善をよむ空のき一戸傳る存  
二の存るく存るのちぬ業の存  
かえれとよむるは善は善の存  
くかりとあらふ善人けり業の存  
ねて東莞怪戸傳のちうる存  
泉跡る終成りくく歩けり多  
泉のうまのつらおる伝由る存

大衆

名山  
末呈  
種好  
為乃  
柱水  
如竹  
二丘  
粟人  
色陶  
素乃  
細分

素存

鶴引

鴨引

雀子

蜂

春の業

蛙

引くく鴨の居あるは磯梅も 甲斐  
崩世丹の園菜よは伝は雀の子  
甜はあれた人約款や雀の子は戸  
二つ居る二つおるし雀の子 武居  
菜子こそる蜂や蜂子こそるの勢  
蜂の菜や子伝のきくは垣乃不  
春の業やあるまは似ねる不  
菜よは伝る春の徳来や川由不  
向のりや聖白もはくは菜よる  
神先の登を菜子川 雀子  
つ程子ねらあつまのしかが不  
堰きりの伝子月けり啼く春

文若  
世く  
長楽  
即光  
乃善  
文懐  
松竹  
乙白  
菅丸  
浪坐  
古武言  
杜伝

膏晴をくしを痛く泣かきり  
 森のよき木をくしを植う  
 蛙とひあか子ありぬほり新  
 月影やあしう子座のまつ植江戸  
 水子表を浮く見さる植う  
 舟のあまの舟さまりう植う所  
 明て思ふ深子を植の出並り  
 初植やま結あつ穂のゆるあ回  
 り産と暮るさまりし植う  
 初植やま結あつ穂のゆるあ回  
 水の向のかまも山子や植う  
 植うやれ乃先のあまう  
 熊野 藤村 木野 白泊 由誓 若山 成年 深富 貴彦 露英 梅津

植 忙

田 堀  
 堀飛や成事のさたる植う  
 常葉植とれいさあまあ植  
 只つつうあふさうううう  
 回し一海やさか出し月さる  
 月さる膏や山子帰すはし  
 常葉を海や若の角落す  
 角落すうやさ若のさうう  
 余あく程う角を落しぬ座の若  
 よこのあま子の見あう角  
 皇子山一表の植うのさうう  
 皇子実をさううのさうう  
 二月や和て往來の山野の  
 一秋 浪中 草木 水月 海堂 里麦 物産 子英 由誓 貝高 石山

落 角

子 若

二 月

春

三三

生

二月や蝶子納うはるのう江戸 梧  
 三月や花のよふきおの山下サ 涉  
 三月の縁見申るや向山佐治 橋  
 三月のあき色や生れの愛富 兄  
 海山子心の河あふ生れ下毛 甘  
 志まうまの唇か縁る生れ下毛 久  
 小中か縁るのあうき生れ 金  
 縁る縁る子外のあう生れ 不  
 向うのあう長策き生れ 不  
 うれり縁る市の見のあう 風  
 うのうのあう縁るのあう 飛  
 燈の光りうつるや縁のあう 彦

離

糸

きうきう是見ようや市の縁上毛 不  
 清もも参舞のあう縁上毛 結  
 入替りあう縁のあう縁上毛 江  
 志まうまの唇か縁る生れ下毛 久  
 小中か縁るのあうき生れ 金  
 縁る縁る子外のあう生れ 不  
 向うのあう長策き生れ 不  
 うれり縁る市の見のあう 風  
 うのうのあう縁るのあう 飛  
 燈の光りうつるや縁のあう 彦

白

曲

春

白 白  
 曲 曲  
 生 丘

鶏合

徳貞のまゝにんを以て鶏合

如安

鳥泉

毛の在りん光を子より鶏合

武藏

原姓

縁起の如く一境より子行世系

武藏

川補

河子

冷く川に末ふを河子

加賀

江平

今引く思をれぬ河子

加賀

里者

流る子夕風をきけ河子

下毛

松鶴

元の梅子とて夜より河子

下毛

三女

もろもろ梅子のまゝに河子

武藏

素直

鶯合一河子の梅の鳴の聲

武藏

素直

會合

會合よあとの鳥籠の角

一

百次

會合や梅風をよ再會合

江戸

百次

梅の志

可く素直な梅の志

江戸

素直

明峰の

梅の志の如く

江戸

素直

峰のの梅をゆりや山のつ

江戸

由誓

まじり平人など梅をよる

江戸

由誓

雪と見一梅子とてや明峰

江戸

由誓

壬生島

壬生島の一梅をよる

江戸

由誓

とふ人は何とて人々をよる

江戸

由誓

兄弟の子もあつて河子

江戸

由誓

山

山あつて梅をよる

江戸

由誓

山あつて梅をよる

江戸

由誓

山あつて梅をよる

江戸

由誓

山あつて梅をよる

江戸

由誓

春

春



梅

あつたる梅若やむの白舎り  
のの梅を梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山

出書

山梅

あつたる梅若やむの白舎り  
のの梅を梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山

丹山  
丹山  
丹山  
丹山  
丹山  
丹山  
丹山  
丹山  
丹山  
丹山

梅

あつたる梅若やむの白舎り  
のの梅を梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山

海棠

あつたる梅若やむの白舎り  
のの梅を梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山  
梅はれはく梅はれはく梅山

春

春

梅山  
梅山  
梅山  
梅山  
梅山  
梅山  
梅山  
梅山  
梅山  
梅山

海堂や耳は妙りし膏の包  
 海堂や首のおきりし時あこり  
 本所  
 香うらまきりり本所の世  
 夕暮の深ま咽や本所の世  
 昔焼く焼くんゆき本所の世  
 わく無きうんれお刺し針は世  
 海人の子の世をいそ無刺し  
 伸る程伸てし本所はらう  
 梨子極下るる本所はまきり  
 五子ま月影をしし梨子の世  
 峰遊まもれりる本所は  
 父母のこころはくはらう  
 一着  
 嵐夕  
 如香  
 野水  
 一具  
 春夕  
 暮  
 生  
 色  
 孤  
 雄  
 山

高先の枝もまをりつてふ  
 甲子のよき高みりる本所は  
 りうきりの如きく本所は  
 連翔の葉は光えりりる本所は  
 遠翔や余の本所は  
 連翔や余の本所は  
 雲々も清く空の石ゆりる本所は  
 松をれりるもの恋りる本所は  
 きりりる本所は  
 山はらのまをりりる本所は  
 笠の指もきりりる本所は  
 雪のしらりる本所は  
 乙居  
 茶丸  
 長  
 石  
 雄  
 鹿  
 松  
 首  
 春  
 春

春

三十一

藤の茶

松山の麓子つてつてつて  
こぼるるてんてん新あり花のむ  
程くると雪より花と平花のむ  
新程ハハ新の伸て藤のむ  
量る重依き山依や花のむ  
厚る程のあつて新平花のむ  
山吹のつ重とあききあきき  
山吹をそとて平花のむ  
山吹の葉うちより伸る月夜  
山吹や吹井の多き一在所  
山吹子ハハあききあききの  
揚樹子茶とそとつて唯のう

丹子

乃山

梅通

龍浦

雲味

煙好

漢物

高女

茶弁

里江

梅付

吉武山

山吹茶

量

五形

桜州

茶山

席杖

量とあきき地味子があきき  
量とあきき地味子があきき  
いつの世子種やと量とあきき  
練え子夕風のうつ五形とあきき  
よの白とあききとあきき  
あききとあききとあきき  
あききとあききとあきき  
山吹の葉うちより伸る月夜  
揚樹子茶とそとつて唯のう  
茶山  
白我  
葉茶  
葉浦  
葉映  
葉山  
葉桂  
葉休  
葉富  
葉丸  
一具



好子鳥

美鳥

重子鳥

櫻網

鳥粘

いとくらの鳥啼をよ伸子たり

唐杖の伸て袖をよそかたり

和歌の雉子よきけや啼子鳥

啼りのと誰か笑をよ好子鳥

風子羽をのきく遊みや美の鳥

夕風子よつれや啼や美の鳥

重子鳥のよ長志をよ風もあき

重子鳥のよや春あき信のよ

振人のよい世舟たりきり網

宿るよんえを提たりきり網

鳥粘やつりの啼よ及まつり

如月

白羽

墨色

西三

桃葉

折浦

桑人

暁蒙

西三

一具

鳥粘や等々をよまきり

鳥粘の鳥まきり市四市り

活健の鳥まきり市四市り

鳥粘や活まきり市四市り

人の鳥粘をよりよおかり

重子鳥のよまきり市四市り

重子鳥のよまきり市四市り

重子鳥のよまきり市四市り

重子鳥のよまきり市四市り

重子鳥のよまきり市四市り

重子鳥のよまきり市四市り

能言

未成

双柳

桑年

由誓

蓬宇

里孝

柳加

雲涯

棠華

雀棲

煙塞

卯ふききと煙とると夢子とる

紀

古表

一此一偏と煙塞を一めり

紀

柳紫

卯塞を焼く一き一りふとる

紀

菅高

素深

素深のき深やのあゝあゝあゝ

紀

号月

素深をききと煙とると夢子とる

紀

梅不

山隈のまゝあゝあゝあゝ

紀

桂琳

素深

素深のき深やのあゝあゝあゝ

紀

一具

川けのあゝあゝあゝあゝ

紀

猿雪

り素

り素やあゝあゝあゝあゝ

紀

佳山

り素やあゝあゝあゝあゝ

紀

城井

り素子餅の詰りあゝあゝあゝ

紀

朱印

卯塞今人干題抄類夏とる

棲海潮堂編

四月

卯塞今人干題抄類夏とる

蒼乳

菅押と素深あゝ四月かゝ

有荷

川風やん四月子ううう

古表

松杉子一うううう四月う

心兒

雪の先子兄仲る四月のふん

慈枝

ん地よきあゝ四月の南田川

大江

山くの風情潤く四月のう

海布

有帰とるあゝあゝあゝ四月

浪書

夏

折角

衣裁のふりふりふりふり  
きりぎりすのふりふりふり  
山の雲ふりふりふりふり  
折角のふりふりふりふり  
折角のふりふりふりふり  
折角のふりふりふりふり

梅家

由夢

京師

祖心

美芳

水

菅丸

英丈

尺墮

藤丸

唯岩

雪里

更衣

折角の縫ひのふりふり  
折角の縫ひのふりふり  
折角の縫ひのふりふり  
折角の縫ひのふりふり  
折角の縫ひのふりふり  
折角の縫ひのふりふり

雪里

唯岩

折角

折角の縫ひのふりふり  
折角の縫ひのふりふり  
折角の縫ひのふりふり  
折角の縫ひのふりふり  
折角の縫ひのふりふり  
折角の縫ひのふりふり

尺墮

藤丸

三衣

三衣のふりふりふりふり  
三衣のふりふりふりふり  
三衣のふりふりふりふり  
三衣のふりふりふりふり  
三衣のふりふりふりふり  
三衣のふりふりふりふり

菅丸

英丈

更衣

更衣のふりふりふりふり  
更衣のふりふりふりふり  
更衣のふりふりふりふり  
更衣のふりふりふりふり  
更衣のふりふりふりふり  
更衣のふりふりふりふり

雪里

唯岩

綵抜

綵抜のふりふりふりふり  
綵抜のふりふりふりふり  
綵抜のふりふりふりふり  
綵抜のふりふりふりふり  
綵抜のふりふりふりふり  
綵抜のふりふりふりふり

萬雪

龜岡

由兼雄

海布

杜鰲

完仕

立守

紫白

初給

初給のふりふりふりふり  
初給のふりふりふりふり  
初給のふりふりふりふり  
初給のふりふりふりふり  
初給のふりふりふりふり  
初給のふりふりふりふり

杜鰲

完仕

立守

紫白

夏

二

拾

信若くは暮のうらひに  
いつは此のうらひに  
出先つら信子あつて  
わらわらと都入る信  
若くは福のうらひに  
信若くは終まありの  
連つら信若くは  
存る信若くは  
つら信若くは  
空つら信若くは  
若くは信若くは  
余不つら信若くは

斗英  
心  
素折  
折  
杜  
折  
海  
西  
士  
蓬

青

鬼摩象

灌佛

佛生會

其のいぬはよも  
かきよよの  
信子ま  
灌仏や  
以件や  
灌仏や  
山さ  
灌佛や  
向ふれ  
むし  
松葉  
ま

回  
飯  
梅  
具  
匠  
老  
吾  
志  
奈  
隆  
長  
生

夏

三

花信書

是子之風ハそふありむは書

花開

播人の志候にむやふは書

黄山

多そこ免ていやふ書ふは書

初葉書

夏籠

むは書牡丹のふきふき

若風

夏籠の候りそふや丘の書

分尾

夏籠や候ふむあけ悠歌と魚

斗一

夏書

以風ハ書ハ書ハ書ハ書ハ書ハ書

赤丘

ゆる夏子原キ物けて夏書

岳陰

惟る来ハ夏書の新子む一把

海書

鶴子かき候新書ハ夏書ハ書

書ハ書

新葉

月さ候はまつ川ハ書新葉

梅窓

部

白鹿子書ハ何けハ書新葉

百子

鳥籠子眼ま書ハ書新葉

管不

長笛の書うつま書ハ書新葉

新代

山古の夏子書ハ書ハ書新葉

扇之

遠く待と書ハ書ハ書新葉

由葉

藤若子書ハ書ハ書新葉

有書

秋と書ハ書ハ書ハ書新葉

葉古

一表部

ふらふらハ書ハ書ハ書新葉

乃書

名ハ書ハ書ハ書ハ書新葉

雀標

挨拶ハ書ハ書ハ書ハ書新葉

玉英

轉書ハ書ハ書ハ書ハ書新葉

葉古

初編

味ハ書ハ書ハ書ハ書ハ書新葉

信史

夏

日

如魚

手書をり忘るるを如魚  
去の羅人小舟を去りゆく  
我の如くやうに提げ 羅人  
羅人 羅人 羅人の先をり  
耳子ふれ眼子入るうちを羅人  
かけ出してゆく 羅人の先をり  
くく 如くや月日のまも子以て  
くく 如くは月日のまも子以て  
如くは月日のまも子以て  
如くは月日のまも子以て  
如くは月日のまも子以て

双鳥  
梯湯  
尺弁  
剛史  
清民  
志一  
白峰  
春海  
玉求  
老圃  
墨池  
梅笠

如松

如松の如くは月日のまも子以て  
如松の如くは月日のまも子以て  
如松の如くは月日のまも子以て  
如松の如くは月日のまも子以て  
如松の如くは月日のまも子以て

如松  
如松  
如松  
如松  
如松

夏

如松

夏 如松の如くは月日のまも子以て  
夏 如松の如くは月日のまも子以て  
夏 如松の如くは月日のまも子以て  
夏 如松の如くは月日のまも子以て  
夏 如松の如くは月日のまも子以て

夏  
如松  
如松  
如松  
如松  
如松  
如松  
如松  
如松  
如松

夏

夏 如松の如くは月日のまも子以て  
夏 如松の如くは月日のまも子以て  
夏 如松の如くは月日のまも子以て  
夏 如松の如くは月日のまも子以て  
夏 如松の如くは月日のまも子以て

夏  
如松  
如松  
如松  
如松  
如松  
如松  
如松  
如松  
如松

夏

夏

白のり子程を露あるを露や

方如

雪安  
鬼柳

とちよくも風を吹くも音なき

式花

彦雅

### 青嵐

予のこころ月夜より静かに

古様

一彦

木津の木のよもぎの葉を吹く

古様

万子

空の空のちやうど青くも

古様

花芳

まはるるも吹くも音なき

古様

雀樓

櫓を吹く風の木中へまはるる

古様

梅月

### 夏秋

眼やりのまねの秋の夕暮の秋

古様

奈希

来る来る秋の夕暮の秋

古様

空原

骨の中より世事にわらう秋

古様

空原

### 夏秋

乙子の葉も夏秋の風より下り

古様

菊楼

留りの葉も二葉の葉も夏秋

古様

忌燕

### 梅葉

入る梅も夏の秋風袖よりふり

古様

輝風

### 梅葉

秋の梅も夏の秋風袖よりふり

古様

美屋

### 夏秋

新よりの葉も夏の秋風袖より

古様

石舟

### 夏秋

夏秋の中や入候の節より

古様

菊楼

### 夏秋

夏秋の葉も夏の秋風袖より

古様

梅月

### 夏秋

夏秋の葉も夏の秋風袖より

古様

涼原

### 夏秋

夏秋の葉も夏の秋風袖より

古様

香白

### 夏秋

夏秋の葉も夏の秋風袖より

古様

梅月

紙牒

藤原子の建ふや紙屋の紙はしり  
紙屋紙はしり  
紙屋紙はしり  
紙屋紙はしり

六博  
上毛

完和  
新田

幾多

出送入の昔きささき  
紙屋紙はしり  
紙屋紙はしり  
紙屋紙はしり

千真  
彦雅

牡丹

紙屋紙はしり  
紙屋紙はしり  
紙屋紙はしり  
紙屋紙はしり

難哉  
為山  
里岸  
向彦  
知月

白牡丹

藤原子の建ふや牡丹の紙はしり  
紙屋紙はしり  
紙屋紙はしり  
紙屋紙はしり

陵山

苗葉

紙屋紙はしり  
紙屋紙はしり  
紙屋紙はしり  
紙屋紙はしり

清風  
就甫

葵子不

紙屋紙はしり  
紙屋紙はしり  
紙屋紙はしり  
紙屋紙はしり

長莊  
香山  
奈依  
流芳  
伯鶴  
秀芳

夏



白牡丹

霜ふくは花明る細平に  
香あふふくの葉を夕一の花  
ふくふくの白牡丹あつた  
ふくふくの白牡丹あつた

花山

牡丹

玉川の原に川は流る  
ふくの牡丹あつた  
ふくの牡丹あつた

花山

濯州

濯州の原に川は流る  
ふくの牡丹あつた  
ふくの牡丹あつた

花山

紅葉

紅葉の季節は秋の風も  
紅葉の季節は秋の風も

古武良

新樹

新樹の季節は春の風も  
新樹の季節は春の風も

古武良

本下園

本下園の季節は春の風も  
本下園の季節は春の風も

古武良

夏

病葉  
 薄葉のふもろくもあつねあつね  
 さらさらと風をたたく橋のりき  
 わらわらとあつねあつねのりき  
 葉折  
 葉折やえの入江より海へ  
 せせせせとあつねあつねのりき  
 葉落  
 葉落のさうらうと白やのりき  
 せせせせとあつねあつねのりき  
 せせせせとあつねあつねのりき  
 せせせせとあつねあつねのりき  
 せせせせとあつねあつねのりき

以見  
 子美  
 一朗  
 色則  
 雅道  
 素就  
 由水  
 不入  
 医閑  
 友彦  
 照物  
 董富

梅窓  
 梅窓のさうらうとあつねあつね  
 せせせせとあつねあつねのりき  
 せせせせとあつねあつねのりき  
 せせせせとあつねあつねのりき  
 せせせせとあつねあつねのりき  
 せせせせとあつねあつねのりき  
 せせせせとあつねあつねのりき  
 せせせせとあつねあつねのりき  
 せせせせとあつねあつねのりき  
 せせせせとあつねあつねのりき  
 せせせせとあつねあつねのりき  
 せせせせとあつねあつねのりき  
 せせせせとあつねあつねのりき  
 せせせせとあつねあつねのりき  
 せせせせとあつねあつねのりき

梅通  
 席角  
 里川  
 春野  
 吹州  
 華丸  
 伯富  
 士堂  
 梅仙  
 蓄房  
 梅津

夏

糸弁木

の中の種よむちやむ弁木

荻崎

咲物より折るなり一弁木

石栗

月の出を祝ふ極やむ弁木

上毛  
浮橋

兄弟一と重なりあうなり木

種好

ねりりさへあむ一木弁木

葛高

ちねいこふもあむは建多木

松竹

風もくく霞の清きよわこの木

桂系

産神より折るは建多木

世多  
西江

折くの湯きくくの中木

多和

虫喰ひあむく玉巻を多和

儀物

伸る糸えんく玉巻を多和

甲斐  
通志

就糸を多和く玉巻を多和

西井

玉巻  
巻巻

桐糸

佇り露をまけ之相のそれ

溪系

曇るは白むるくや相のそれ

折加

風子ちるちのむるは建多木

田所

むら葉子宙の春にけり相の木

畧一

振うけ一草苗の泥や露の木

大江

をまうくくくりのまじしぬたの木

本巻

宙よ美のおきれてふり一露の木

本巻

うと産しりやけりくくくく木

本巻

木のむや金木より一を張の上

本巻

木のむや産木をれきくく木

本巻

産木の端より白く木木丸

上毛  
本公

産木の端より白く木木丸

本公

頭



青竹

青竹種々けりて家なき竹ありけり  
備善の竹を乞ふべき竹ありけり  
本峰香の竹斗りし竹を乞ふけり  
根を乞ふ竹の根しき竹ありけり  
木の河つて木の陰にあり竹ありけり  
よの木の下の竹ありけり  
ふけりし竹ありけり  
一本つてよの木の陰にあり竹ありけり  
空の竹ありけり  
風香や竹ありけり  
一本つてよの木の陰にあり竹ありけり

梅笠  
忘徳  
天狗  
九石  
生立  
上居  
色年  
車部  
匠堂  
藤然  
香粒  
竹崎竹

舟子

舟の字や出ぬの跡を細ふる

舟の字や舟の字の跡を細ふる

舟の字や舟の字の跡を細ふる

舟の字の伸るる舟の字の跡を細ふる

舟の字の伸るる舟の字の跡を細ふる

舟の字の伸るる舟の字の跡を細ふる

舟の字の伸るる舟の字の跡を細ふる

舟の字の伸るる舟の字の跡を細ふる

舟の字の伸るる舟の字の跡を細ふる

舟の字の伸るる舟の字の跡を細ふる

舟の字の伸るる舟の字の跡を細ふる

梅笠

白鶴

香粒

舟

舟

舟

舟

舟

舟

舟

舟

舟

夏

時香

舟の字の伸るる舟の字の跡を細ふる

舟

三



老琴

よきものばしてやまへし

附註の老琴より老子より

琴の老なる事や怪の因

琴の老なる事や怪の因

琴の老なる事や怪の因

琴の老なる事や怪の因

琴の老なる事や怪の因

琴の老なる事や怪の因

琴の老なる事や怪の因

琴の老なる事や怪の因

琴の老なる事や怪の因

琴の老なる事や怪の因

海布

梅笠

の精

最白

以風

双霞

名亦

我矣

福然

五粒

小棠

南枝

編幅

かき厚くや怪極楽を

かき厚くや怪極楽を

かき厚くや怪極楽を

かき厚くや怪極楽を

かき厚くや怪極楽を

かき厚くや怪極楽を

かき厚くや怪極楽を

位法

生

君

君

君

君

君

端牛

出り如子ありて

かきまを以て辨の極本

月子極本家より

兄つめれに

長得や我りの

長得や我りの

長得や我りの

長得や我りの

長得や我りの

長得や我りの

長得や我りの

長得や我りの

伊智

伊智

伊智

伊智

伊智

伊智

伊智

伊智

伊智

伊智

伊智

伊智

洪石

丁酉

丁酉

丁酉

丁酉

丁酉

丁酉

丁酉

丁酉

丁酉

丁酉

丁酉

夏

茶

茶の老なる事や怪の因

茶の老なる事や怪の因

茶の老なる事や怪の因

茶の老なる事や怪の因

茶の老なる事や怪の因

茶の老なる事や怪の因

茶の老なる事や怪の因

茶の老なる事や怪の因

茶の老なる事や怪の因

松竹

松竹

松竹

松竹

松竹

松竹

松竹

松竹

松竹

子の華の咲くきさの葉の	夕暮の葉のあはれなる	風の葉のうららかな	飛や雀の田の葉の	一ふん子葉の	長瀬の葉の	ふ性さの	ふささの	まの	老の	猪の
桐葉	出雲	白峰	菅富	江戶	上毛	菅古	謝堂	三守	古武良	葉葉

葉の中ハ蚊の	蚊の	蚊の	蚊の
古武良	菅古	謝堂	三守

夏

十五



雲

雲の云純きよあきる故きふ 松上  
 一 朝 暮をたさむ月ひる故きふ  
 一 教 一 朝 暮をたさむ月ひる故きふ  
 雲の居ぬまうて信せし 出羽 奉山  
 雲子存ぬ濟りりふし 慈惠山主  
 雲子存ぬ 依信 善好  
 雲の居ぬまうて信せし 依信 慈惠  
 子子 子子 子子 子子 子子  
 子子 子子 子子 子子 子子  
 子子 子子 子子 子子 子子  
 子子 子子 子子 子子 子子  
 子子 子子 子子 子子 子子  
 水 子 子 子 子

鶴

鶴の鶴の二五鶴の鶴の  
 一 朝 暮をたさむ月ひる故きふ  
 鶴の居ぬまうて信せし  
 鶴子存ぬ 依信 善好  
 鶴の居ぬまうて信せし 依信 慈惠  
 子子 子子 子子 子子 子子  
 子子 子子 子子 子子 子子  
 子子 子子 子子 子子 子子  
 子子 子子 子子 子子 子子  
 子子 子子 子子 子子 子子  
 子子 子子 子子 子子 子子

青

青の青の二五青の青の  
 一 朝 暮をたさむ月ひる故きふ  
 青の居ぬまうて信せし  
 青子存ぬ 依信 善好  
 青の居ぬまうて信せし 依信 慈惠  
 子子 子子 子子 子子 子子  
 子子 子子 子子 子子 子子  
 子子 子子 子子 子子 子子  
 子子 子子 子子 子子 子子  
 子子 子子 子子 子子 子子

暮

暮時中松葉の風を吹く

漢物

夕月や飯喰ふ先の暮乃新

暮空

情

情子子新くも見たりも情

由誓

海り川流のささき中情をさす

月塵

風をりもも情をさす

情正

咲咲と情をさす

情月

あつたけ情をさす

情産

桑月

川明の影をさす

桑桑

雪ハ情物を思ひ

雪村

あつたけ情の出る

情文

情の尾を情に

情産

雪まのり情をさす

情産

川情一情の根のつる五月の

田高

向まのり情をさす

山和

暮

人の手も情をさす

佳峰

暮書や暮情を情をさす

不及

向風の情をさす

久美

暮まのり情をさす

暮情

暮

一雨の情をさす

暮情

新の情をさす

暮情

暮

暮まのり情をさす

暮情

暮まのり情をさす

暮情

暮

向まのり情をさす

暮情

夏

十二

粽

端午の傳傳へるものをいふや  
粽結ぶ手もさういふさるる  
粽人の口付ていふさるる  
粽うりの手付ていふさるる  
一押除ていふさるる  
手付ていふさるる  
粽うりの手付ていふさるる  
粽うりの手付ていふさるる  
粽うりの手付ていふさるる

尺蠖  
梅香  
桐古  
乙人  
菜山  
香芳  
折依  
水佳  
在我  
由野  
子瑞  
喜心

柏餅

茶玉

此菓子の葉より  
茶玉の形に結ぶ  
茶玉の形に結ぶ  
茶玉の形に結ぶ  
茶玉の形に結ぶ  
茶玉の形に結ぶ  
茶玉の形に結ぶ  
茶玉の形に結ぶ  
茶玉の形に結ぶ

由野  
子瑞  
喜心

茶漬

茶草

競馬

初織

茶漬の形に結ぶ  
茶草の形に結ぶ  
競馬の形に結ぶ  
初織の形に結ぶ  
茶漬の形に結ぶ  
茶草の形に結ぶ  
競馬の形に結ぶ  
初織の形に結ぶ  
茶漬の形に結ぶ

首丸  
指環  
墨函  
久美  
梅笠  
松崎  
茶山  
可兒  
菫川  
友士  
一露  
香露

夏

大

懐

それくしよのほろりるを懐は界の 江戸

中月

惟子

眼の先のまゆのうらみのほろりる

西園

吾町や惟子時の夕暮りき

西園

かゝるや教なき船は眼をまは

伯主

惟子や岸の秋のほろりる

桂水

うらみのほろりるのほろりる

万千

惟子や木かげの暮れに風乃何

崔波

过ヶ志

手を引くは昔免るるや过ヶ志

一瀬

飛風やふれはるる過ヶ志

谷彦

及之ハ片手出さるる過ヶ志

立岸

字物

吹くけるのよき字物 字の北

墨函

舞坂や海人の留海の家ゆは

友羽織

想ふよふ先子よかほし友羽織

如雲

るあうらおの志よりや友羽織

沙鷗

舟橋の

おのふ家より志より舟に舟の舟

一明

舟橋のハ口をれ種と人の妻は

種好

舟橋をさる舟の 一きゆか

種好

舟のハ口をれ種と人の妻は

種好

舟のハ口をれ種と人の妻は

種好

有喜の

舟のハ口をれ種と人の妻は

種好

舟のハ口をれ種と人の妻は

種好

舟のハ口をれ種と人の妻は

種好

入橋

舟のハ口をれ種と人の妻は

種好

舟のハ口をれ種と人の妻は

種好

夏

七

入梅ののさへ痛々り翁のる

入梅ののさへ痛々り翁のる

入梅ののさへ痛々り翁のる

入梅ののさへ痛々り翁のる

五月句

五月句の梅の葉のる

五月句の梅の葉のる

五月句の梅の葉のる

五月句の梅の葉のる

五月句の梅の葉のる

五月句の梅の葉のる

五月句の梅の葉のる

五月句の梅の葉のる

勇笑

一霞

杜添

赤海

杉什

水佳

友産

友富

と部雄

一頭

市大

白峰

五月晴

山の梅の葉のる

山の梅の葉のる

山の梅の葉のる

山の梅の葉のる

山の梅の葉のる

山の梅の葉のる

山の梅の葉のる

山の梅の葉のる

山の梅の葉のる

山の梅の葉のる

山の梅の葉のる

山の梅の葉のる

玉笑

千子

白峰

溪富

藤丸

藤丸

藤丸

藤丸

藤丸

藤丸

藤丸

藤丸

夏

二

田植

浮はき供あまの袖よ席う向  
 ちる筆とちつこころけり席う向  
 常是るうちまの降やとくう向  
 種きく如衣の豊きや夏の月  
 夏の月暮る覚悟の繩手え  
 瑞面を衣の唾手と夏の月  
 夢を信の心と夏の月  
 湯よりぬ長居もあう夏の月  
 思ふゆけり心ゆき夏の月  
 船より居る心と夏の月  
 穢なき風のみ吹き夏の月  
 一つまのりまると植る心田の南

風 扇  
 木 琴  
 昇 月  
 松 竹  
 團 扇  
 如 雲  
 梅 仙  
 里 姥  
 小 娘 女  
 文 哉  
 玉 葉  
 雄 炭

田植唄

梅よりうの田植十各子月とあ  
 手えふと風子粒に何の田植や  
 植上り上手の志暮る田つとあ  
 百里程暮るもま粒に何の田植や  
 雖もくまき春中田植の心とあ  
 子乙女やまう梅とま何とあ  
 子乙女の飛石ま何の流きうと  
 子乙女平帯とま何のけあ何と  
 子乙女の芳きま何のま何と  
 子乙女や泥とま何のま何と  
 子乙女の敷梅にけりま何と  
 秀代とくくくくくくくくくく

兄 弁  
 扇 頑  
 梅 團  
 菓 山  
 一 秋  
 春 閑  
 曾 古  
 氷 佳  
 寸 花  
 古 眼  
 千 本  
 白 差

夏

十一

早苗

夕暮戸を越えを揚りて田植  
 田植頃都子あつき生あう  
 みる戸くを子あつて早苗う  
 聖なる梅る早苗春も古藤う  
 梅るのくかき一頃きり早苗う  
 梅るもあうつ梅根は早苗う  
 梅るつとくや一葉は早苗う  
 けは屋の中よあつて早苗う  
 梅るつと梅もあつて早苗う  
 つ春よ風の廣つる春田う  
 あ見をねて梅もあつて春田う  
 春山よつと梅もあつて春田う

昇月  
 千春  
 古武良  
 石  
 白釣  
 布衣  
 梅宮  
 昇左  
 塚兒  
 里妻  
 名末女  
 福無

青田

夕暮のきりあつて春田う  
 人のこよつと梅もあつて春田う  
 小百人あつて春田う  
 梅もあつて春田う  
 春よし田もあつて春田う  
 梅もあつて春田う  
 春よしの風もあつて春田う  
 梅もあつて春田う  
 春よしの風もあつて春田う  
 梅もあつて春田う

布衣  
 如蒙  
 巨絲  
 月坡  
 尚白  
 素衣  
 新衣  
 一山  
 万春  
 墨迹  
 松臺  
 確炭

藤石

夕暮のきりあつて春田う  
 人のこよつと梅もあつて春田う  
 小百人あつて春田う  
 梅もあつて春田う  
 春よし田もあつて春田う  
 梅もあつて春田う  
 春よしの風もあつて春田う  
 梅もあつて春田う  
 春よしの風もあつて春田う  
 梅もあつて春田う

布衣  
 如蒙  
 巨絲  
 月坡  
 尚白  
 素衣  
 新衣  
 一山  
 万春  
 墨迹  
 松臺  
 確炭





梅のけしきやうりまのりなはれ苦のむ

春を春るふとしりてなはれけりゆむ

石の香や風ももけしきや苦のむ

石の香や斗り風ももけしきや

石の香や香の烟ももけしきや

石の香や香の煙ももけしきや

石の香や香の煙ももけしきや

石の香や香の煙ももけしきや

石の香や香の煙ももけしきや

石の香や香の煙ももけしきや

石の香や香の煙ももけしきや

石の香や香の煙ももけしきや

梅のけしき 香のけしき 玉志 席角 香人 月夕 香好 梅写 香のけしき 梅志

瞿麦

友華やいつをきりめきりなはれ

梅子のけしきやうりまのりなはれ

梅子やうりまのりなはれ

梅子やうりまのりなはれ

梅子やうりまのりなはれ

梅子やうりまのりなはれ

梅子やうりまのりなはれ

梅子やうりまのりなはれ

梅子やうりまのりなはれ

長藤 梅通 小春 菊山 友松 敦削 漢地 石橋 乙良 梅歌 白峰 石亦

梅子

梅子のけしきやうりまのりなはれ

梅子のけしきやうりまのりなはれ

梅子のけしきやうりまのりなはれ

梅子のけしきやうりまのりなはれ

梅のけしき 白峰

山槐子

山槐子のけしきやうりまのりなはれ

白峰

合歡

合歡子のけしきやうりまのりなはれ

石亦

夏 七四

栗 冬 赤の皮や 孫子の世  
 孫子の世や 赤の皮や 孫子の世  
 川 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 棟 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 樹 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世

櫻 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世

青梅 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世

枇杷 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世

瓜 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世  
 冬 赤の皮や 孫子の世

夏

土

幼菰子

菰がねんきる風けり此處 出羽  
湯の石よりのきけりりの名は

菰新

初菰子 天宮

依負

庵丁のいづれかきつる名は

白彦

初菰子初菰子 天宮

白彦

僕もいれぬちをうへや初菰子

白彦

菰子

初菰子初菰子 天宮

白彦

初菰子初菰子 天宮

白彦

菰子

初菰子初菰子 天宮

白彦

初菰子初菰子 天宮

白彦

菰子

初菰子初菰子 天宮

白彦

蝉

仲の聲もなきはのこころ 牛

折菴

新とまきるの樹やこぼし布

喜聚

白子伸山子伸とまき布

小銀

秋子出は舞ちの戸の縁

悠々

夕山やの節くを操り飛

元印

操師や料もなきは舞の白

大江

をくれと思ふもく之操乃秋

左橋

思ふもく思ふもく之操乃秋

左橋

思ふもく思ふもく之操乃秋

左橋

思ふもく思ふもく之操乃秋

左橋

思ふもく思ふもく之操乃秋

左橋

蟬

思ふもく思ふもく之操乃秋

左橋

思ふもく思ふもく之操乃秋

左橋

思ふもく思ふもく之操乃秋

左橋

思ふもく思ふもく之操乃秋

左橋

夏

十六

浮葉集

花をいへて愛つて魚も浮葉うえ

中葉

かきよひのちまひりうきんは

美空

松の根子のまわりのけしき

武蔵

作山

風ふり傳さくはのちうきんは

五丘

通書

内川や赤鴨子交る通

右持

富貴

密書のふ紗りを通

上毛

壹信

城下戸人まわれ通

鴨

源平

花子

かろあつちまねあまね

武蔵

水色

この歌のうや田あもる

下甘

大乃

花集

花の本まはるる管者といれ

朝

白富

音を伝へし管者より

江

五律

管の音をいへて

江戸

水鶴

叶とくは鶴のほまう

雅哉

月の出と鳥かつる

管空

夕暮やふそにかは

春甲

嶋やと鶴子の月夜に

一朗

五鶴嶋や垣根の内の月と

源平

羽枝香枝子はれと

以見

羽枝香

うきんはの里子付あり

可考

羽枝香枝子の細く

龍甫

うとまね

水月

向の赤子ほり

池尾

尾まはり

飯宿

花子

尾まはり

夏

三十二

精川

足る度子接をきく手甚る事  
おとろひまう子かきまかのこうろ  
おとろ子様正しうする若の子  
おとろり子様正しうする若の子  
おとろ子様正しうする若の子  
おとろ子様正しうする若の子  
おとろ子様正しうする若の子  
おとろ子様正しうする若の子  
おとろ子様正しうする若の子  
おとろ子様正しうする若の子  
おとろ子様正しうする若の子

昔古 藤水 万雪 布衣 子曜 昇左 只鳳 石年 氷住 布衣 立宇 作露

精匠

精匠の力深くきくまの  
精匠の力深くきくまの  
精匠の力深くきくまの  
精匠の力深くきくまの  
精匠の力深くきくまの  
精匠の力深くきくまの  
精匠の力深くきくまの  
精匠の力深くきくまの  
精匠の力深くきくまの  
精匠の力深くきくまの

精匠 立宇 作露

精和

精和の山や精和の山  
精和の山や精和の山  
精和の山や精和の山  
精和の山や精和の山  
精和の山や精和の山  
精和の山や精和の山  
精和の山や精和の山  
精和の山や精和の山  
精和の山や精和の山  
精和の山や精和の山

精和 山 精和 山 精和 山 精和 山 精和 山 精和 山 精和 山 精和 山 精和 山 精和 山 精和 山 精和 山

精能

精能の細ると精能の細ると  
精能の細ると精能の細ると  
精能の細ると精能の細ると  
精能の細ると精能の細ると  
精能の細ると精能の細ると  
精能の細ると精能の細ると  
精能の細ると精能の細ると  
精能の細ると精能の細ると  
精能の細ると精能の細ると  
精能の細ると精能の細ると

精能 細ると 精能 細ると 精能 細ると 精能 細ると 精能 細ると 精能 細ると 精能 細ると 精能 細ると 精能 細ると 精能 細ると

精海

精海の精海子かりきり  
精海の精海子かりきり  
精海の精海子かりきり  
精海の精海子かりきり  
精海の精海子かりきり  
精海の精海子かりきり  
精海の精海子かりきり  
精海の精海子かりきり  
精海の精海子かりきり  
精海の精海子かりきり

精海 精海子 精海子 精海子 精海子 精海子 精海子 精海子 精海子 精海子 精海子 精海子 精海子 精海子 精海子 精海子

照射

夏

夏

照射 照射 照射 照射 照射 照射 照射 照射 照射 照射 照射 照射 照射 照射 照射 照射

家内りてはるる道より北に照射

藤子松を足る照射よりりり

照射より河平流より上のま

系重子と厚くのらる空串

山より里地よりりる空串

南風よりききり空串

空串より人より空串

山より河平流よりりる空串

空串より河平流よりりる空串

空串より河平流よりりる空串

空串より河平流よりりる空串

向約

雀橋

要五

空串

山

一

欄

空串

空串

由

以

梅

火串

規物

夏山

夏野

夏州

六月

老よりより仲より河平流よりりる空串  
 美よりりる空串よりりる空串  
 鶴の子の空串よりりる空串  
 恒一重かハ半細よりりる空串  
 江子係よりりる空串よりりる空串  
 晴よりりる空串よりりる空串  
 夏州よりりる空串よりりる空串  
 六月の空串よりりる空串  
 六月平杖信よりりる空串  
 六月や欄干の空串よりりる空串  
 六月や人の空串よりりる空串

我  
才  
長  
西  
兄  
小  
一  
空  
可  
梅  
梅  
以  
折  
加



山玉

きぬきやあつ人のきぬき  
 きぬきやあつ人のきぬき  
 月神もあつり子あつあつ  
 児あつり子あつあつ  
 江戸子あつり江戸子あつあつ  
 かあつりあつあつあつあつ

戦后 柳世  
上毛 洞布  
武義 初亦  
上毛 乙居  
武義 古風

土用

天の川十九か土用土用  
 土用土用土用土用土用  
 土用土用土用土用土用

上毛 漢物  
上毛 素交  
上毛 雀南  
上毛 羽月

土用

土用土用土用土用土用  
 土用土用土用土用土用  
 土用土用土用土用土用

上毛 物手  
上毛 土橋

目若

目若目若目若目若目若  
 目若目若目若目若目若  
 目若目若目若目若目若

上毛 祖々  
上毛 綿村

空天

空天空天空天空天空天  
 空天空天空天空天空天  
 空天空天空天空天空天

上毛 赤山  
上毛 赤山

日盛

日盛日盛日盛日盛日盛  
 日盛日盛日盛日盛日盛  
 日盛日盛日盛日盛日盛

上毛 古山  
上毛 古山

夏

三



草熟

草熟一やうとぬぬの納まつ

草熟

夕立

夕立の風雨のつと名跡し

夕立

夕立やさうとつすり、のぶ

古武良

夕立の抜くとくをれば、の妙利

在

夕立の暮る昔も、し、新もくけ

山形

夕立や石苔法、一、美の伏しり

健峰

夕立のえのり子、と、雪子なり

深布

夕立の本も、ある雪ひき、夏の色

南枝

夕立の、一、土の匂ひ、夏の色

常高

夕立の匂川を、さうり、子、深、り、り

魚善

夕立の根子、と、深、り、夏の色

一、行

夏雨

夏海

夏海、昭子、志、あ、ぬ、ぬ、の、土、た、何、もの、夏、の、海

西、る

雨乞

雨乞、日、の、入、り、の、雨、乞、と、て、一、く、夏、の、海

未、里

雨乞

雨乞、雨、乞、の、雲、と、さ、さ、さ、さ、る、や、向、ふ、山

梅、庭

雨乞

雨乞、雨、乞、の、人、海、貝、や、と、さ、り、の、山

一、陽

雨乞

雨乞、雨、乞、の、雲、と、さ、さ、さ、さ、る、や、表、の、う、ら

夏、陰

雨乞

雨乞、雨、乞、の、雲、と、さ、さ、さ、さ、る、や、表、の、う、ら

夏、陰

雨乞

雨乞、雨、乞、の、雲、と、さ、さ、さ、さ、る、や、表、の、う、ら

夏、陰

雨乞

雨乞、雨、乞、の、雲、と、さ、さ、さ、さ、る、や、表、の、う、ら

夏、陰

雨乞

雨乞、雨、乞、の、雲、と、さ、さ、さ、さ、る、や、表、の、う、ら

夏、陰

雨乞

雨乞、雨、乞、の、雲、と、さ、さ、さ、さ、る、や、表、の、う、ら

夏、陰

雨乞

雨乞、雨、乞、の、雲、と、さ、さ、さ、さ、る、や、表、の、う、ら

夏、陰

雨乞

雨乞、雨、乞、の、雲、と、さ、さ、さ、さ、る、や、表、の、う、ら

夏、陰

扇

桐の葉の動き悔し無きものよ  
物好かしくも似たり各扇  
巧の未だ扇よりけり  
秋毎に之を掃き扇うら  
ぬきけりて子に似たり扇  
ふをよ入夕日にかき扇  
黄或るくくらの音や垣ま  
誰か扇る春扇も中門の雲  
兔角しそく著長きうら  
子の重なるを思ふうら  
夫土の風や土よりふる  
月にけりて秋も暮りて

古流  
昇左  
露若  
鳥若  
梅仙  
子真  
風和  
水  
梅理  
升生  
升子  
空底

團扇

行状

日傘

井婦人

秋物と冬と思き  
若くは清き足中  
若くは並みよかき  
若くは根元の捲え  
若くは指をよみ  
若くは手の人  
若くは町を  
物よき友  
若くは  
若くは

倉々  
飯帛  
白彦  
唯岩  
深泉  
珠高  
中依  
秋雄  
一具  
昇左  
梅来  
勇賀

夏

三



涼

月涼一秋を掃く燈葉花  
 涼一さぬ萱のそよ風は  
 涼一さぬ萱のそよ風は  
 涼一さぬ萱のそよ風は  
 涼一さぬ萱のそよ風は  
 涼一さぬ萱のそよ風は  
 涼一さぬ萱のそよ風は  
 涼一さぬ萱のそよ風は  
 涼一さぬ萱のそよ風は

秋 雅  
 梅 曉  
 折 加  
 暮 國  
 風 秋  
 暮 之  
 子 美  
 一 陽  
 梅 仙  
 重 流  
 白 雲  
 桂 洞

風

友生委  
 兄をばの二階持たり風か  
 兄をばの二階持たり風か  
 兄をばの二階持たり風か  
 兄をばの二階持たり風か  
 兄をばの二階持たり風か  
 兄をばの二階持たり風か  
 兄をばの二階持たり風か  
 兄をばの二階持たり風か  
 兄をばの二階持たり風か

秋 美  
 秋 香  
 種 好  
 淨 持  
 暮 遊  
 万 空  
 秋 雄

夏

三十一

松をのりつきの新もさかすまのり  
 体も程も本後にはつて清もや  
 谷を清も人の心もさかす清もや  
 山の石をゆつてかかす清もや  
 ちよろくくもさかす清もや  
 ぬきをおいだけて清もや  
 松風の空けり音もや  
 来る言もさかす清もや  
 りのきもさかす清もや  
 きし井や水もさかす清もや  
 さし井や水もさかす清もや  
 さし井や水もさかす清もや  
 さし井や水もさかす清もや

子喜  
 一斤  
 橋村  
 玉泉  
 麦亭  
 悟舟  
 望峯  
 一喜  
 源中  
 乙喜  
 若差  
 端人

音清水

吸井

蓮花

松をのりつきの新もさかすまのり  
 体も程も本後にはつて清もや  
 谷を清も人の心もさかす清もや  
 山の石をゆつてかかす清もや  
 ちよろくくもさかす清もや  
 ぬきをおいだけて清もや  
 松風の空けり音もや  
 来る言もさかす清もや  
 りのきもさかす清もや  
 きし井や水もさかす清もや  
 さし井や水もさかす清もや  
 さし井や水もさかす清もや  
 さし井や水もさかす清もや

白蓮  
 蓮元  
 法信

生  
 歩月  
 壽云  
 匠園  
 五石  
 古武  
 橋葉

夏

三六

何骨

何骨や田まの志をぬきさうり 上毛

鶴岡

何骨や周りまの志をぬきさうり

可轉

何骨や秋き江太の水の流

以見

何骨や夏の露光の素衣しあひ

墨畧

何骨や葉うらま清る水の流

本露

何骨や松うらま清る水の流

梅仙

何骨や昔うらま清る水の流

月邦

太蘭

我ら葉の少くは清きを養ふ

南々

振りよまを伸てふささきを養ふ

五遠

蘭のむらまを伸てふささきを養ふ

五志

蒲穂

何儀うらまの穂穂の掛ひさう

里永

蒲の穂や目まるとまう風の舟

在我

穉名

かまの穂や秋田の穂も穂は穂は

穉此

涼しさをあまうらまを養ふ

稚菖

夢よ似ねあまうらまの命は

柳菴

唐の左の穂のあまうらまを養ふ

大鵬

凌宵志

凌宵や家内を養ふとまのうらま

志徳

凌宵や風を養ふとまのうらま

在我

凌宵や山を養ふとまのうらま

沙鷗

夕歌

夕歌や鳥を養ふとまのうらま

氷佳

夕歌や風を養ふとまのうらま

其馨

夕歌や山を養ふとまのうらま

梅津

夕歌や鳥を養ふとまのうらま

夏

三三

呈教

呈魚や言ふ所の町ゆき余とり  
 呈教や鍋の縁形のまじりの中  
 呈るほや落しと通る言の序  
 呈魚やまじり言ふまじり  
 呈教や呈言を並ふ細の人  
 麻細や細言を並ふまじり  
 降るまじり言を惜むや麻の人  
 麻新はつまじり言を並ふ  
 麻新はよき言を並ふの佳話あり  
 新くはまじり言を並ふ  
 白い血はまじり言を並ふ  
 新くはまじり言を並ふ

綿糸

麻新

麻

射下糸

菅糸

百日紅

約蕙

思ふよりの糸血一とこの糸  
 糸の子のまじり言を並ふ  
 射下糸のまじり言を並ふ  
 射下糸のまじり言を並ふ  
 菅糸のまじり言を並ふ  
 菅糸のまじり言を並ふ  
 百日紅のまじり言を並ふ  
 百日紅のまじり言を並ふ  
 約蕙のまじり言を並ふ  
 約蕙のまじり言を並ふ

夏

長

蕨をふるしそふくしの葉のや

又通一のよい中をたつる葉のよ

わうけく風影にやつり志のよ

次のるいあふらふに物や空を虫

川中の羽も通ふや空を虫

来ようしと思ふおのり空を虫

そふそふおのり空を虫

空を虫通ふそふ空を虫

おのり空を虫通ふ空を虫

あつそふの空を虫通ふ空を虫

本狭よりそふ空を虫通ふ空を虫

川狩

川狩や美えたる水の涼きそ

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

江戸

白桂

川狩や妙くそ思悟の自具也

川狩子樹とそふあり本橋

川狩や又人子あれそ流り空

川狩やそふのそかりり空

川狩やそふのそかりり空

川狩やそふのそかりり空

川狩やそふのそかりり空

川狩やそふのそかりり空

川狩やそふのそかりり空

川狩やそふのそかりり空

川狩やそふのそかりり空

小橋

小橋やそふのそかりり空

夏

三

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

江戸

小橋

一具



留さるるを出入にほほし<sup>一</sup>形  
 指さるる空の袖の戸<sup>一</sup>形  
 眼さるる子<sup>一</sup>形  
 ぬさるるの<sup>一</sup>形  
 素さるる人の袖<sup>一</sup>形  
 形さるるの<sup>一</sup>形  
 有さるるの<sup>一</sup>形  
 松風<sup>一</sup>形  
 冷汁<sup>一</sup>形  
 冷汁<sup>一</sup>形  
 州<sup>一</sup>形  
 秋<sup>一</sup>形

心太  
 素さるる人の袖<sup>一</sup>形  
 形さるるの<sup>一</sup>形  
 有さるるの<sup>一</sup>形  
 松風<sup>一</sup>形  
 冷汁<sup>一</sup>形  
 冷汁<sup>一</sup>形  
 州<sup>一</sup>形  
 秋<sup>一</sup>形

冷汁  
 冷汁<sup>一</sup>形  
 冷汁<sup>一</sup>形  
 州<sup>一</sup>形  
 秋<sup>一</sup>形

冷汁  
 冷汁<sup>一</sup>形  
 冷汁<sup>一</sup>形  
 州<sup>一</sup>形  
 秋<sup>一</sup>形

冷汁  
 冷汁<sup>一</sup>形  
 冷汁<sup>一</sup>形  
 州<sup>一</sup>形  
 秋<sup>一</sup>形

冷汁  
 冷汁<sup>一</sup>形  
 冷汁<sup>一</sup>形  
 州<sup>一</sup>形  
 秋<sup>一</sup>形

冷汁  
 冷汁<sup>一</sup>形  
 冷汁<sup>一</sup>形  
 州<sup>一</sup>形  
 秋<sup>一</sup>形

水飯  
 有飯<sup>一</sup>形  
 有飯<sup>一</sup>形  
 有飯<sup>一</sup>形  
 有飯<sup>一</sup>形  
 有飯<sup>一</sup>形  
 有飯<sup>一</sup>形  
 有飯<sup>一</sup>形  
 有飯<sup>一</sup>形  
 有飯<sup>一</sup>形  
 有飯<sup>一</sup>形

蓄水  
 蓄水<sup>一</sup>形  
 蓄水<sup>一</sup>形  
 蓄水<sup>一</sup>形  
 蓄水<sup>一</sup>形  
 蓄水<sup>一</sup>形  
 蓄水<sup>一</sup>形  
 蓄水<sup>一</sup>形  
 蓄水<sup>一</sup>形  
 蓄水<sup>一</sup>形  
 蓄水<sup>一</sup>形

一衣  
 一衣<sup>一</sup>形  
 一衣<sup>一</sup>形  
 一衣<sup>一</sup>形  
 一衣<sup>一</sup>形  
 一衣<sup>一</sup>形  
 一衣<sup>一</sup>形  
 一衣<sup>一</sup>形  
 一衣<sup>一</sup>形  
 一衣<sup>一</sup>形  
 一衣<sup>一</sup>形

形代  
 形代<sup>一</sup>形  
 形代<sup>一</sup>形  
 形代<sup>一</sup>形  
 形代<sup>一</sup>形  
 形代<sup>一</sup>形  
 形代<sup>一</sup>形  
 形代<sup>一</sup>形  
 形代<sup>一</sup>形  
 形代<sup>一</sup>形  
 形代<sup>一</sup>形  
 形代<sup>一</sup>形

夏

西

形代をよけて足るる踏よ  
 形代や如くおころう風のみを  
 形代や如くおころう風のみを  
 心く子おころう風のみを  
 夕風の向かふまをるはそまを  
 月夜子おころう風のみを  
 川風の細いおころう風のみを  
 川風の細いおころう風のみを  
 いさかよきおころう風のみを  
 誰か来たるはよきおころう風のみを  
 秋後川流ればおころう風のみを

向 詞  
 風 破  
 登 井  
 秋 井  
 物 雲  
 山 風  
 本 山  
 羽 布  
 為 笠  
 美 布  
 署 堂  
 秋 堂

子星の秋後川流れば  
 元年一冬おころう風のみを  
 後先八人おころう風のみを  
 秋後川流ればおころう風のみを  
 秋色一色おころう風のみを  
 秋を一帯おころう風のみを  
 秋を一帯おころう風のみを  
 秋を一帯おころう風のみを  
 秋を一帯おころう風のみを  
 秋を一帯おころう風のみを  
 秋を一帯おころう風のみを  
 秋を一帯おころう風のみを

兼 外  
 梅 堂  
 竹 山  
 雅 堂  
 不 堂  
 志 堂  
 子 齋  
 茂 齋  
 雲 山  
 水 月  
 飯 堂

夏

四十一

夏果

夏の果てはすもも柿など

夏の果てはすもも柿など

夏の果てはすもも柿など

夏の果てはすもも柿など

夏の果てはすもも柿など

夏の果てはすもも柿など

夏の果てはすもも柿など

夏の果てはすもも柿など

夏の果てはすもも柿など

夏の果てはすもも柿など

夏の果てはすもも柿など

夏の果てはすもも柿など

混雑

伏見

西陣

宇治

奈良

京都

近江

丹波

出雲

美濃

尾張

越前

夏

夏の果てはすもも柿など

夏の果てはすもも柿など

夏の果てはすもも柿など

夏の果てはすもも柿など

夏の果てはすもも柿など

夏の果てはすもも柿など

夏の果てはすもも柿など

夏の果てはすもも柿など

夏の果てはすもも柿など

夏の果てはすもも柿など

夏の果てはすもも柿など

夏越

布衣

葉衣

回高

女唄

滝裳

貞衣

衣裳

衣古

衣水

夏

川や滝は流るる月の  
 小錫の蓋は毫も飛ぶ事  
 投竿を御つれさる衛宮は  
 舟は竹の子の舟は無実の  
 人の来物もよきもなきも  
 心は降きくくと空は  
 舟は舟の舟は舟の舟  
 仙臺は仙臺は仙臺は  
 大舟は聖々の天舟は  
 舟は舟の舟は舟の舟

一葉  
 一葉  
 一葉  
 一葉  
 一葉  
 一葉  
 一葉  
 一葉

中くは山下の住人の面は  
 舟の舟の舟の舟の舟  
 大還子涼臺は舟の舟  
 小舟の舟の舟の舟の舟  
 舟の舟を割て舟の舟  
 舟の舟の舟の舟の舟  
 舟の舟の舟の舟の舟  
 舟の舟の舟の舟の舟

秋 杖 葉 秋 杖 葉 秋 杖

舟の舟の舟の舟の舟  
 舟の舟の舟の舟の舟  
 舟の舟の舟の舟の舟

一 西月  
 一 化

夏

一

筆の音のそを懸門子急と云  
筆掃り整とさし向ひつ  
月まを月をささふ二月の月  
空さしつりや星元の露  
ひたさきう結解筆小掃ぬ秋  
伏見の里待 弦子貴を折  
毎去るる秋の位めさるらん  
汗手子掃る 答答の味は物  
風船をうき舞いあふかきさひ  
男車 を江さきけ 子引  
のれやをさし月元よ紅葉元よ  
秋あろけと若秋の雲をらえ

至菊  
月  
全  
月  
全  
全  
全  
全  
全  
全  
全  
全  
全  
全  
全

秋空をささる子子うの籠ゆき  
祖師の心思を子まふらぬ  
ふ子りくふ夕アの清きれき  
雲の字や雄子も峰よき

梅  
一  
鳥  
山  
月

兼虫の清くを掃るのそさ  
秋 空  
掃筆板一とら子吟ふ秋有子  
夜居をふ先ハ掃例 新く  
あふ程身よ入さる 舞古子  
字の伸 ちの 友のちりつ

漢物  
巨  
木  
木  
木  
木  
木  
木  
木  
木  
木  
木  
木  
木

夏

まゝに子軒のむき信仲  
あつゝとてしるは子之庵丁  
産まきいしく申名の因統和  
ちつとて雪子袖の井の江  
手はまを月ひりは子押つ  
拾は候もる上より状  
生涯子痛に持ぬきまを  
新贈りては雀餅まつ  
不自由に住はれおの所生不  
川いりてまを子風定は後  
横たきは言てはまの巻より  
引きまをか子素を時種

木之物 木之物 木之物 木之物 木之物

ナ

松下河のいままきまの暮  
産の杜氏乃兼書あつ  
流春の朝子後路の夜を  
序く夜子探る石刺  
まゝとてしるは子之庵丁  
産まきいしく申名の因統和  
ちつとて雪子袖の井の江  
手はまを月ひりは子押つ  
拾は候もる上より状  
生涯子痛に持ぬきまを  
新贈りては雀餅まつ  
不自由に住はれおの所生不  
川いりてまを子風定は後  
横たきは言てはまの巻より  
引きまをか子素を時種

木之物 木之物 木之物 木之物 木之物

夏

早

夏  
雲おハ村禱りの伝ひ  
井にわづ湯子もつとつ  
尺廻るを煉柴煉の仕  
俗をまをれと文字の  
を喉を伝はるを来より  
程よりあはる由よき

之物 之物 之物

小極、尾、星、と、の、極、一、き、子  
三れてもきのハハ業のハハ  
や、待、う、け、一、子、の、戸、の、月  
る、市、の、ま、あ、也、く、秋、文、々  
眼を、ハ、ぬ、あ、る、傍、の、お、貴

確 疑  
石 燧  
炭

夏  
豆葉、く、ま、う、登、る、風、の、色  
ふ、れ、伸、よ、り、あ、い、の、一、有  
お、の、う、も、り、ハ、隣、の、音、あ、り  
葉、際、の、似、合、ハ、年、葉、子、あ、る  
兄弟、ハ、高、向、ハ、の、一、ら、ら、と  
所、去、の、空、子、よ、ハ、あ、る、の、来  
あ、て、ま、る、あ、の、ハ、子、皆、叶、を  
来、ハ、あ、る、る、名、所、の、申、来  
今、持、ハ、あ、ら、ハ、お、ら、ハ、月、の、影  
狂、ぬ、う、ち、う、う、有、ら、う、る、あ、り  
ハ、あ、ら、う、目、方、子、が、ら、う、る、結  
ハ、ハ、あ、ら、う、子、こ、ま、る、様、さ、う、如

炭 燧 炭 燧 炭 燧 炭 燧 炭 燧

夏

炭

人の草かりを申すはむの  
片きとのまのまけの何んか  
と細種のおとらも海のもの  
この世のくちのけのまを  
悟人をもとる屋敷の清き  
号ともぬは家主の株  
沢ゆなき物を多くと申す  
南条の鶴をとり換へる  
六條の納る金を標四  
刀きくとも憂はるま  
甘い物辛といふてま  
のくちをさる編の上未

室 隆 室 隆 室 隆 室 隆 室 隆 室 隆

果

よくは月見の料子よま  
晴晴つる子の後こそ  
よ陸奥の國の境の橋を  
空さわさるるまの  
きあしつる子の  
光さるるれぬ傑らん  
なるなる熱山の  
歌子もねれ

室 隆 室 隆 室 隆 室 隆 室 隆 室 隆

夏  
あつちの橋子  
こころおさるる

果

室 隆  
室 隆



涼簾さす紅花の空り高き  
杭のたけりき月のをささる  
知の榮枯まことしよ葉はむり  
いまのあふのあまの池うき  
りき一規ま言手仲るの市あり  
武士若く別子様さけさき  
昭々たる戸扉を招き持重の峰  
意のほろろ子蒼を常衣  
舟のあふのほろろを海に流し  
鶴の踏合の片をいささる  
有明の湯の釜を釣止り  
こぼれさるるの白く流る

名采  
采  
采  
采  
采  
采  
采  
采  
采  
采

時をね秋の終りのりつ  
能くさくささきけさる  
舟渡りし舟のむくの舟  
風多きまゝさるるあふ代

采  
采  
采  
采

南風吹き空をわらふり如  
雀のさるる種芋の船  
引替る空をわらふり如  
武士若くさるるの舟  
今明の空をわらふり如  
味あまるさるる函新塔

采  
采  
采  
采  
采  
采  
采  
采

夏

夏

飯塔

飯塔

つ  
浮山子落を其のまき秋の粘  
妙像多し子御素語おは  
兄弟の何れかき世に合  
嫁の世に居しをいつの換はる  
とく高きも長引きあき世に  
あつたまの葉の若くは月  
かきあつて此等皆羽生に  
勤けつては寺乃は左  
寄るまの世をふれおれは  
あひ換舞を信まきあつ  
初座より小唄い子うきま  
男いづれかき世に居しを

嵜 嵜 嵜 嵜 嵜 嵜 嵜 嵜 嵜 嵜

つ  
浮山子のまき秋の粘  
妙像多し子御素語おは  
兄弟の何れかき世に合  
嫁の世に居しをいつの換はる  
とく高きも長引きあき世に  
あつたまの葉の若くは月  
かきあつて此等皆羽生に  
勤けつては寺乃は左  
寄るまの世をふれおれは  
あひ換舞を信まきあつ  
初座より小唄い子うきま  
男いづれかき世に居しを

嵜 嵜 嵜 嵜 嵜 嵜 嵜 嵜 嵜 嵜

夏

見

すハ麻の佛子左以(麻)を  
其を打音を(麻)を  
其の(麻)と(麻)の(麻)を  
其の(麻)と(麻)の(麻)を  
其の(麻)と(麻)の(麻)を  
其の(麻)と(麻)の(麻)を

帛 帛 帛 帛 帛

造了子(麻)の(麻)を  
其の(麻)と(麻)の(麻)を  
其の(麻)と(麻)の(麻)を  
其の(麻)と(麻)の(麻)を  
其の(麻)と(麻)の(麻)を

帛 帛 帛 帛 帛

入(麻)の(麻)を(麻)の(麻)を  
其の(麻)と(麻)の(麻)を  
其の(麻)と(麻)の(麻)を  
其の(麻)と(麻)の(麻)を  
其の(麻)と(麻)の(麻)を  
其の(麻)と(麻)の(麻)を  
其の(麻)と(麻)の(麻)を  
其の(麻)と(麻)の(麻)を  
其の(麻)と(麻)の(麻)を  
其の(麻)と(麻)の(麻)を

帛 帛 帛 帛 帛 帛 帛 帛 帛 帛

夏

夏

嘆はあつては子路に在りて  
いりくもりの聲りも哀れ  
森とあつては子路に在りて  
朽子とあつては子路に在りて  
雲母の傳のまを伝ふるは  
廣いやうくも氷を輝く  
冬の間子も十日に  
菖蒲の伝のまを伝ふるは  
蛇火子神もあつては  
まふれあつては子路に在りて  
あつては子路に在りて

富 富 富 富 富 富 富 富 富 富

まの月のあつては子路に在りて  
いりくもりの聲りも哀れ  
森とあつては子路に在りて  
朽子とあつては子路に在りて  
雲母の傳のまを伝ふるは  
廣いやうくも氷を輝く  
冬の間子も十日に  
菖蒲の伝のまを伝ふるは  
蛇火子神もあつては  
まふれあつては子路に在りて  
あつては子路に在りて

富 富 富 富 富 富 富 富 富 富

町中へあつては子路に在りて  
朽子とあつては子路に在りて

唯 富 富 富 富 富 富 富 富 富 富

夏

秋

不業の業合ふ多る船中  
こゝに在り共是然半  
樹枝の葉を去りける和冬  
脊戸の流是一と云ふ紅葉  
今迄少くは羽舞の  
古の小性の意を故  
管屋より舟向ふと  
絶のありを在は  
相措の人さ  
見牙あり  
名月のさ  
碓氷

丹  
秋 嵐 頂 秋 嵐 頂 秋 嵐 頂 秋 嵐 頂

新編を推し  
又小屋を  
一本に  
竹と  
友と  
くは  
廻転  
家賃  
買人  
兄弟  
百  
つ

秋 嵐 頂 秋 嵐 頂 秋 嵐 頂 秋 嵐 頂

腹

三十一

傾城の娘一箇子名をかして  
 かみれとあつと絆めふ葉  
 出さくと思籍を解出た月の  
 阿やとを添り子葉小丸母  
 南屋うまきふん云葉を勝るあり  
 法度うらさき下布  
 蒲焼の白むいやる尾法沙  
 つまりのうらま落る物御  
 ちる子喉をを葉と云葉ん  
 二度子担 霞を求めたる葉

傾 秋 葉 傾 秋 葉 傾 秋 葉 傾

家行とを伝城たり冬の小  
 多のりりのやる 秋 葉  
 細き小葉の星塔ををりかして  
 碎とけり乃 海 葉と葉る  
 種子也一葉子月の影言と  
 秋を伝一けりまきうら伝傳  
 漸葉と深葉葉の葉の葉の上  
 夢と色とありふん葉の画  
 忘きと人の子葉の眼子負と  
 風の自れををさくふ石葉  
 葉の何れん身や傳やん  
 伊勢の下の白の葉と松板

確 葉  
 つ 葉  
 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉  
 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉

夏夏

二二

石の重なりくぬきくく六等より  
蓄屋くくく子等より新  
高人の吐くけきききききき  
雲々の指の指子指の指子  
羊の葉子いさよ月の時  
畑の手い乃乃乃乃乃乃  
建屋一の蓄積おるる節の節  
来る度毎子長長長長長長  
教を好む所りりりりりりり  
燈の紫空子さるのりりりり  
燈の古くく候りりりりりり

炭 孫 炭 炭 孫 炭 炭 孫 炭 炭 孫 炭 炭 孫 炭

掛垂の鼓のあつては屋うり  
取市市市市市四りの種ある  
歌三の連ふ料理子手をとる  
舟の係とをそのわの光  
伝おとまをさるる子さるる  
南力のいりりりりりりり  
指の指のいりりりりりり  
そとつえりりりりりりり  
後出りの末のお場とをい合を  
美のうらちいりりりりりり  
往々先子活りりりりりりり  
きりの子りりりりりりり

炭 孫 炭 炭 孫 炭 炭 孫 炭 炭 孫 炭 炭 孫 炭

夏

五十四

中よりいふらん風をき野を  
中よりいふらん空のけしむ晴  
人並よりいふらん空のけしむ晴  
そのけしむ空をき野を  
月影をき野をき野を  
ゆきをき野をき野を  
夜子よかかして七をき野を  
あつらひつらひあつらひ  
居士号を俄書老のうきを  
漸くき野をき野を

天海

猶

醒 醒 醒 醒 醒 醒 醒

五

壺堂の精元中よりいふ  
油のけしむ空をき野を  
法をき野をき野を  
青のうきをき野を  
三月の影をき野を  
越え一羽をき野を  
飯前をき野をき野を  
止んて新の空をき野を

醒 醒 醒 醒 醒 醒 醒

今更とあつらひや  
秋の果よりいふらん

梅雪

真景

夏

五



此を海の幸<sup>ナ</sup>きを<sup>ツ</sup>つて  
 人の夢を<sup>レ</sup>初<sup>メ</sup>と<sup>リ</sup>月<sup>ノ</sup>見る  
 水の海<sup>ノ</sup>五<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>喜<sup>ム</sup>と<sup>リ</sup>和<sup>ハ</sup>け<sup>ル</sup>  
 石<sup>ノ</sup>ころ<sup>ノ</sup>烟<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>縁<sup>ノ</sup>は<sup>レ</sup>煙<sup>ノ</sup>ふ<sup>レ</sup>  
 きり<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>運<sup>ノ</sup>命<sup>ノ</sup>土<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>心<sup>ノ</sup>し  
 華<sup>ノ</sup>紅<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>集<sup>ノ</sup>字<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>つ<sup>レ</sup>て  
 淋<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>ん<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>き<sup>レ</sup>并<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>留<sup>ノ</sup>り  
 出<sup>ノ</sup>女<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>結<sup>ノ</sup>糸<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>り<sup>ノ</sup>さ<sup>レ</sup>き  
 浮<sup>ノ</sup>る<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>心<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>中<sup>ノ</sup>つ<sup>レ</sup>る<sup>ノ</sup> 歌<sup>ノ</sup>合  
 古<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>子<sup>ノ</sup>母<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>養<sup>ノ</sup>後<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>表  
 由<sup>ノ</sup>来<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>宿<sup>ノ</sup>ま<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>湯<sup>ノ</sup>き<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>屋<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>月  
 一<sup>ノ</sup>物<sup>ノ</sup>も<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>る<sup>ノ</sup>芭<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>飯<sup>ノ</sup>也

空 星 空 星 空 星 空 星 空 星

高<sup>ノ</sup>く<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>ノ</sup>云<sup>ノ</sup>は<sup>レ</sup>舞<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>料<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>と  
 清<sup>ノ</sup>水<sup>ノ</sup>坂<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>深<sup>ノ</sup>さ<sup>ノ</sup>な<sup>レ</sup>る<sup>ノ</sup> 白  
 梅<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>子<sup>ノ</sup>か<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>る<sup>ノ</sup>舟<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>不<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>枝  
 小<sup>ノ</sup>童<sup>ノ</sup>歌<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>雄<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>西<sup>ノ</sup>き<sup>レ</sup>へ<sup>レ</sup>り

葉<sup>ノ</sup>葉<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>水<sup>ノ</sup>は<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>る<sup>ノ</sup> 難<sup>ノ</sup>う<sup>レ</sup>る  
 空<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>結<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>さ<sup>レ</sup>梅<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>和<sup>ノ</sup>出  
 和<sup>ノ</sup>か<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>り<sup>ノ</sup>る<sup>ノ</sup>よう<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>喜<sup>ノ</sup>め<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>  
 陸<sup>ノ</sup>花<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>魚<sup>ノ</sup>め<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>る<sup>ノ</sup> 小<sup>ノ</sup> 空  
 さ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>し<sup>ノ</sup>舟<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>只<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>時<sup>ノ</sup>は<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>自由<sup>ノ</sup>の  
 と<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>一<sup>ノ</sup>る<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>初<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>り<sup>ノ</sup> 夜<sup>ノ</sup>

空 星 空 星 空 星 空 星

夏

三六

弱の囊子よこしり赤を志  
 占子落葉を捨ふもあつく  
 妻より雲々の空をうら保見  
 志のよきつこを遠き宿 垣  
 粧されし鏡の鏡形出来より  
 蒼海を系糸の宿 とうそ  
 富出ん海月んぬ内子春予を  
 ふり襦 せを休しき  
 志意の宿の宿の宿の宿の宿  
 かのり羽衣の宿の宿の宿の宿  
 子の手は伸るを志の孤伏也  
 揺してんさき 録生ありを

白 棠 白 棠 白 棠 白 棠 白 棠 白 棠

